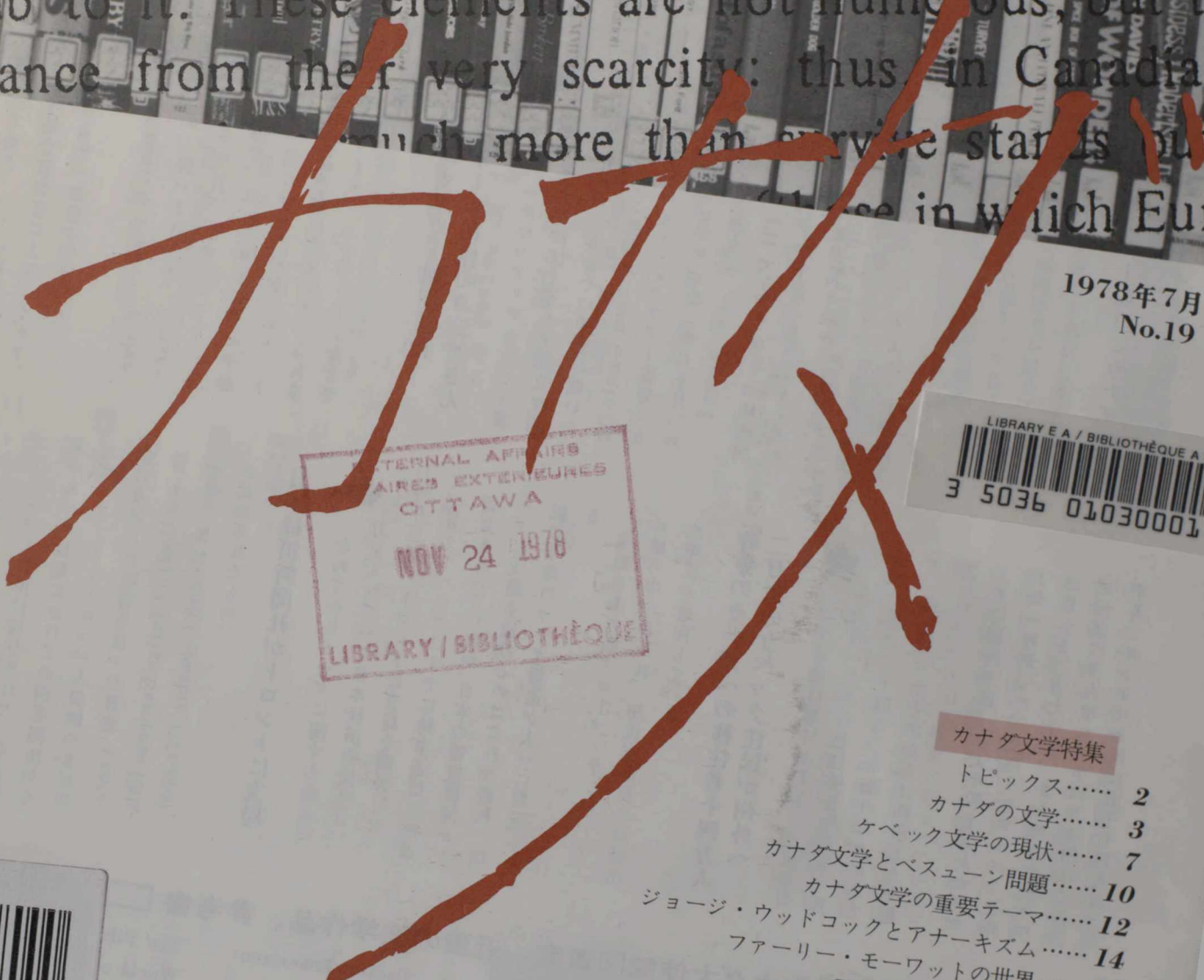


CAI
EA947
B71
#19 Jul. 1978
DOCS

reader must face the
bre and negative, and that this to a large
ection and a chosen definition of the national sensibility. (T
artist takes his colouring from his environment, though h
nsify it by adding a little murk of his own.) But in that lit
e are elements which, although they are rooted in this neg
scend it—the collective hero, the halting but authentic
oughs made by characters who are almost hopelessly trap
ments of affirmation that neither deny the negative gro
cumb to it. These elements are not numerous, but they g
nificance from their very scarcity: thus in Canadian lite
much more than arrive starts but alm
in which Europe



1978年7月
No.19

INTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTÉRIEURES
OTTAWA
NOV 24 1978
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030001 3

60984 81800

カナダ文学特集

- トピックス..... 2
- カナダの文学..... 3
- ケベック文学の現状..... 7
- カナダ文学とベスユーン問題..... 10
- カナダ文学の重要テーマ..... 12
- ジョージ・ウッドコックとアナーキズム..... 14
- ファーリー・モーワットの世界..... 16
- 子ども向けの本から..... 17
- 最近の文学作品..... 18
- カナダの主要な雑誌と新聞..... 21
- 新刊案内..... 21
- カナダの女流作家..... 22
- 書評・「ふくろうが私の名を呼んだ」..... 23
- カナダの生活の中から..... 24
- 編集後記..... 24

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

カナダ作家協会賞に四氏 ジェーン・ルー女史など

「文学的にすぐれ、かつ大衆にアピールする」前年の最優秀文学作品に贈られるカナダ作家協会文学賞の今年度の授賞作品が、次のように決まった。

小説 ジェーン・ルー「The Young in One Another's Arms (お互いの腕の中で)」(Doubleday 社発行)。一九六〇年代のバンクーバーのある下宿屋を背景にした、世代や人種、慣習、階級、人生体験を超えた愛の物語。作者のルー女史には「ほかに」Against the Season」「This Is Not for You」「Desert of the Heart」などの小説や短編集「Theme for Diverse Instruments」'おまびよん・フィクション」(Lesbian Images)などの作品がある。フリティッシュ・コロンビア州ガリアンド島在。

ノン・フィクション ハンス・セルエ「The Stress of My Life (私アストレス)」(McClelland and Stewart 社発行)。著者のセルエ氏は、一九四五年以来モントリオール大学の実験医学研究所の所長をしてきた人で、ストレスの原理に関する研究では世界的権威。作品は、自分自身の生活と研究の中におけるストレスを論じたもので、興味深い自伝になっている。

詩 アラン・ノウラン「Smoked Glass (いぼしガラス)」(Clarke Irwin社発行)。カナダ総督賞(詩の部門)やウエスタン・オンタリオ大学学長賞(小説)を得たこともあるノウラン氏が、これまでいろいろな雑誌に書いた詩の中から選んでまとめた詩集。ノウラン氏はノバ・スコシア州

出身で、十五才で学校を中退してから、農場や製材所で働き、のちに新聞記者となった。作家協会賞受賞により、カナダ文学界における氏の地位が定まったといえる。

演劇 レックス・デベレル「Boiler Room Suite (酔どれ天国)」(Playwrights Co-op 発行)。著者はバブテイスト派の元牧師で、二三年前にアル中患者の人々と一緒に住んだ経験からヒントを得てこの作品を書いたという。これまでに、レジャイナ、エドモントンなどで上演された。

日系女性にオスカー制作者賞 モントリオール在住のヨシダさん

今年のハリウッド・アカデミー賞(オスカー)には、カナダ国立映画制作庁の作品が二本もその荣誉に輝いた。コ・ホーデマン監督の「Sand Castle(砂のお城)」とベバリー・シヤファー監督(女性)の「I'll Find a Way(明日を見つめて)」の二本である。

そのうち、「I'll Find a Way」は映画制作庁の「カナダの子供たち」シリーズの一つで、身体障害児を扱った作品。その制作にあたった、カナダの日系二世ユキ・ヨシダさんには、オスカー制作者賞が授与された。

ヨシダさんは、戦前は故郷のバンクーバーで女優および歌手への道を進んでいたが、戦後は映画制作に転じて世界各地で映画をとり続けてきた。五十五才。

フィッシャー教授にカナダ史賞

カナダ史研究に最も貢献した人に

贈られるジョン・A・マクドナルド(カナダの初代首相)歴史賞が、今年にはサイモン・フレザー大学のロビン・A・フィッシャー教授に授与された。十八世紀から一九世紀にかけての西部開拓がインディアンとヨーロッパ人猟師の友好関係に及ぼした影響を扱った著書「Contact and Conflict: Indian-European Relations in British Columbia 1774-1890」が認められたもの。

日本経済新聞社がトロントに支局

かねてからカナダに関する報道に力を入れていた日本経済新聞社は、今年三月、トロントに支局を開設した。バンクーバーにはすでに時事通信社が通信員をおいていたが、日本の報道機関がカナダに支局を設けるのはこれが最初。同紙の今後のカナダ報道が大いに期待される。

支局は有力紙グローブ・アンド・メール紙の中におかれ、初代支局長には橋田忠明氏が赴任している。

昨年のカナダへの移住者十四万人 二万余のケベック住民が州外へ

カナダ統計局によると、一九七六年六月一日から七七年五月三十一日までの間に、十四万二千余人々がカナダへ移住し、カナダからは約四万人が転出した。

また国内では、およそ四十万人が州から州へ移動した。そのうちアルバータ州は差引き二万七千人、またサスカチュワン州は六千人増え、ケベック州は二万三千人、オンタリオ州は五千七百人減った。

カナダ大使館図書館 近着の文学作品、参考書

ENGLISH:		FRENCH:	
Atwood, Margaret	"Lady Oracle," 1976.	Blais, Marie-Claire	"Une liaison parisienne," 1966.
Hebert, Anne	"The Silent Rooms," 1974.	Maillet, Andrée	"Le Miroir de Salomé," 1977.
Myers, Martin	"The Assignment," 1971.	Major, André	"Les rescapés," 1976.
Richards, David Adams	"Blood Ties," 1976.	Martel, Emile	"Les gants jetés," 1977.
Sutherland, Ronald	"Snow Lark," 1971.		
Wilson, Betty	"Andre Tom Macgregor," 1976.		
Gallent, Mavis	"My Heart Is Broken," 1974.		
Crawford, Isabella Valancy	"Collected Poems," 1972.		
Callaghan, Morley	"A Fine and Private Place," 1975.		
Cohen, Leonard	"The Spice-Box of Earth," 1972.		
		Davies, Robertson	"The Fifth Business," 1970.
		Davies, Robertson	"World of Wonders," 1975.
		Laurence, Margaret	"The Diviners," 1974.
		Richler, Mordecai	"The Apprenticeship of Duddy Kravitz," 1974.
		Scott, F.R.	"Selected Poems," 1966.

EXTERNAL AFFAIRS



AFFAIRES EXTÉRIEURES

TO / À The Under-Secretary of State for External Affairs, OTTAWA (FAI)

SECURITY / Sécurité UNCLASSIFIED

FROM / De The Embassy of Canada, TOKYO

DATE October 16, 1978

REFERENCE / Référence

NUMBER / Numéro 948

SUBJECT / Sujet Bulletin Canada Issue No. 19 - Canadian Literature Special

FILE	DOSSIER
OTTAWA	
MISSION	56-13-3

ENCLOSURES / Annexes

DISTRIBUTION

BY POST

(with att.)

GPO

- WSHDC
- MXICO
- CMBRA
- DELHI
- PARIS
- HAGUE
- CAIRO

The following topics are included in Issue No. 19:

Page

- 2 - Four writers receive Canadian Writers' Association Awards
- Japanese-Canadian woman wins Oscar production award
- Professor Fisher wins Canadian History Award
- Nihon Keizai Shimbun establishes a bureau in Toronto
- Summary of last year's immigration statistics
- List of library acquisitions in the field of Canadian literature

Topics

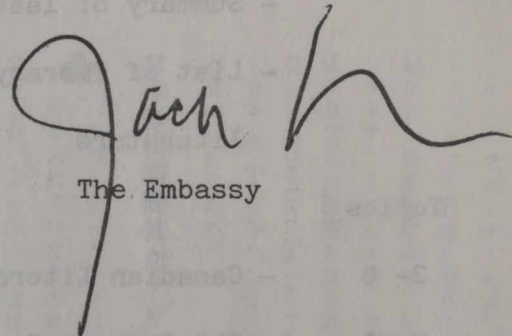
- 3- 6 - Canadian Literature by George Woodcock
- 7- 9 - The Current Condition of Quebec literature by Georges-Hebert Germaine
- 10-11 - Canadian Literature and the Bethune Problem by Professor Keiichi Hirano, Professor of English Literature at the University of Tokyo
- 12-13 - The Theme of Survival in Canadian Literature

OCT 25 1978

.... 2

- 14-15 - George Woodcock by Professor Henry V. Nelles,
Professor of History at York University
- 16-17 - The World of Farley Mowatt
- 18-19 - Current Literary Productions
- 21 - Important Canadian Magazines and Newspapers
- 22 - Canadian Women Writers
- 23 - A review of I Heard the Owl Call My Name by
Mr. Akio Chida of Aoyama Gakuin
- 24 - Living in Canada by Mrs. Fusako Komura

2. Issue No. 19 proved to be extremely popular and has been reviewed by The English Journal (circulation 100,000), which has ... resulted in many additional requests for copies. Attached are 30 copies of this issue.



The Embassy

カナダの文学

その特徴と歴史の変遷

ジョージ・ウッドコック

カナダにおける文学活動の誕生は、ロバート・ヘイマンがニューファンドランド最初の植民地の総督になった一六二一年にまで遡ることができる。ヘイマンは、この地において、カナダに関して最初の詩を書いた。これは「クアドリベツツ(混成曲)」という題の、エビグラム(風刺詩)ならびに小詩で、一六二八年にロンドンで出版され、当時の英国王チャールズ一世に捧げられた。

カナダで書かれた最初の小説は、それよりおよそ一世紀半もたった頃、やはりロンドンで出版された「エミリー・モンテギュー物語」である。作者はフランス・ブルック夫人というケベック駐屯隊員の妻で、サミュエル・ジョンソン博士の知人でもあった。彼女は永住するつもりでこの地に来たものではなかった。作品は一種の風俗小説で、もし後世のカナダ小説および小説家達の関心事と共通する特徴がなかったならば、英軍の小さな駐屯地などどこでもありそうな単純な筋立ての風俗小説として終わっていたであろう。しかしこの小説には、現代カナダの小説家ヒュー・マクレナンが「二つの孤

独(一九四五年)の中で鋭く問題にしたあの状況を予知させるような、フランス系とイギリス系とのあいまいな関係がすでに看取されるだけでなく、寒さの厳しいカナダ的環境も描かれている。初期のカナダ文学としては、探検家の書いた物語の中にもすぐれたものがある。ハドソン湾会社の貿易商サミュエル・ハインは、一七六九年から一七七二年にかけて、獲物を求めて各地をわたり歩くインディアンの狩人の一団と一緒に、ハドソン湾と北極海にはさまれたツンドラ地帯を徒歩で何度か旅をして回った。このときのことを記した話が、一七九五年に出版された「プリンス・オブ・ウェールズ要塞から極地の海への旅」である。これは、簡潔にして表現力に富む物語の典型であり、おそらくはカナダにおける真の文学性を備えた最初の作品といつて良いだろう。同系の内容のものには、すでに一九〇〇年頃、ヘンリー・ケルシーが好奇心あふれる日記を書いている(ただし、出版されたのは今世紀に入ってから)。ケルシーという人は、インディアンの一隊に加わって西方へ旅した毛皮商人の卵

で、カナダの平原地帯を見た最初の白人である。彼はバッファロー狩りやグリズリー(灰色の大クマ)との戦いのことを素朴な二行連句で記録したが、これによって大陸の中心部のことを初めて英語で歌った詩人として後世に知られている。

このほか、一八世紀末から一九世紀の前半にかけて、何人かの旅行家が北極海へのカナダの旅や、太平洋への陸路の旅を見事な旅行記にまとめている。そのひとつ、ポール・ケーンが旅行画家としての自らの経験をまとめた「芸術家の放浪(一八五九年)」は、アメリカ大平原地帯の原住民を描いたジョージ・キャットリンの初期の絵画と並んで、一八四〇年代のカナダ・インディアンならびに太平洋岸のインディアンの記録として特筆すべき作品になっている。

他

方、詩の方面では、初期の頃のカナダ詩人は形式上の獨創性を持たず、また内容においてもカナダの環境に直接的な反応をほとんど示さなかった。これはそもそも開拓者精神の裏返しなのであって、未知の土地で全く予想のつかぬ状況と未開の世界の脅威にさらされ、開拓者は自己を守るために旧知の文化をそのまま複製しようとした。ただ、「ジェゼベル」のようなヘビシージの詩に見られるように、ほんのときたま、借り物の伝統的形式を打ち破ろうとする情熱に出ることがある。チャールズ・サンクスタの詩の中で風景を歌った感動的な少数のアが書いた詩劇「テクムセ」(一八八六年)などには、作者がカナダの詩人はこの国

クロフォードの作品



の経験にこそ詩想を求めなければならぬと、かすかながら考えていたことが、初めて見てとれるのである。一八八〇年代以前には、こうした状況が一般的であった。わずかに唯一の例外が、イサベラ・バランシー・クロフォードであろう。クロフォードはビクトリア時代の未婚婦人で、その生活範囲も狭く、はかない人生を送った人であった。にもかかわらず、彼女は見たこともない未開地と、そこに住む原住民の生活を歌った。彼女のドラマチックなイメージと情熱に彩られた詩は、カナダではこれまでに見られぬものであり、そしてそれ以後においても、これと匹敵するものは少ない。

保

証と継続性を求める開拓者は、小説の世界でも歴史的な形式をとったが、一八八〇年以前に書かれたもので読み返すに値するカナダの小説は、単に伝統的というだけではなく、ゴシック趣味すれすれのロマンチズムに満ちたものが多い。カナダ生まれで、一八二二年の英米戦争に一六歳で参戦したジョン・リチャードソン少佐(このとき彼はシャウニー族の酋長テクムセがイギリスを支援して率いたインディアン軍と共に戦った)は、過去のカナダ史上事件と自分自身の目撃した経験とを題材をとった二冊のセンセーショナルな小説を書きあげた。一七六〇年代に起こったポンティアックの陰謀を扱った「ワクースタ」と、一八二二年の戦争を描いた「カナダの同胞た

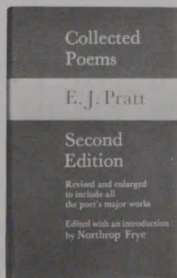
ち」がそれで、いずれも大そうメロドラマチックなものであった。血の抗争と原住民による残虐行為を満載した内容だが、初期カナダ人の複雑なメンタリティをよくあらわしている。すなわち、見覚えがあり、したがって安堵感を与えるゴシック風の恐怖の風習の中に表現された未開の大自然に対する恐れとか、題材を扱う際の実際主義などがありありと読み取れるのである。リチャードソンの文章は機能的で物を観察する目もきわめて正確、とくに身をもって体験した軍事行動の描写に関してはそうである。

リチャードソンに続くカナダの小説家は、歴史もののジャンルにとらわれているようであり、とくに一七五九年の英国の勝利以前のロマン化されたニュー・フランスに題材を求めたものが多い。この傾向に、ロザンナ・レブローンの「アントワネット・ド・ミルクール」(一八六四年)、ウイリアム・カービーの「黄金の犬」(一八七七年)がある。その他の作家は、当時ふえつつあった巡回図書読者のむけに、おさまりの恋愛小説を書く者が多かった。

一九二〇年代に入ると、カナダ詩界の長期にわたる隆盛——今もなお続いている——が始まった。E・J・プラットの初期の詩集「ニューファンドランドのうた」(一九二三年、など)や、ドロシー・リブセイの初期の詩「グリーン・ピッチャー」(一九二八年)、A・J・M・スミス、F・R・スコット、A・M・クラインなどを含むモントリオールの若き詩人グループ(一九二〇年代に雑誌「マクギル・フォトナイトリ・レビュー」に集まっ

たグループで、一九三六年に有名なアンソロジー「ニュー・プロビンシズ」を発表したが、これはカナダの詩史上、重大な位置を占めるとされている)などにおいて、カナダの詩は植民地的な過去への依存性からぬけ出て、まず英米のモダニズムから多くを得つつ、コスモポリタニズムへ、そして次にはカナダ自身の驚くほど多様性に満ちた声を発見するまでに成長した。

前にあげた詩集「ニュー・プロビンシズ」にスミス、スコット、クラインらと筆をとったE・J・プラットは、ルディ・ブラスト風の二行連句で叙事詩を書く、ある種の創造者であった。フランス領カナダ時代のイエズス会殉教者をテーマとした詩「プレフと信者たち」(一九四〇年)や、CPR(カナダ太平洋鉄道)建設をうたった詩「最後のスパイク」(一九五二年)は、彼より若い世代の形式的なモダニズムにはない何か、つまりそれを補う個性を、カナダ詩界に与えたのである。



プラットの作品

一九三〇年代は、カナダの詩に關して収穫の時代というよりは種まきの時代と見なければならぬ。世界的な不況により本の出版は難しくなった。事実、スミスやスコット、クラインらがそれぞれ処女詩集を出版したのは、一九四〇年代になってからである(この事情は他の精力的な若手詩人アール・バーニーやP・K・ページ、ルイス・デュデック、

アービング・レイトソン、レイモンド・スースターにしても同じことである)。ここにあげた詩人のうちプラットとクラインを除いて、あとの全員が現在でも詩人として活躍している。むしろアール・バーニーとかドロシー・リブセイなど最年長組の何人かは、この十年間で今までのどの時期よりもすぐれた活動をしているほどである。

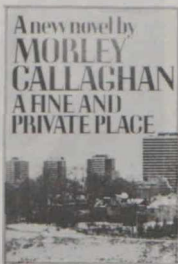
以上にあげた一九三〇年、四〇年代の世代に続くのが、一九五〇年代の若手詩人の新人群であろう。アカデミックで知的なこの詩人達は、カナダの偉大な批評家ノースロップ・フライが唱えた文学と神話の役割に関する理論に影響を受けた。たとえ実践の面では異なっても、詩人の役割というものに対する考え方においては大きな影響を受けている。このグループでは、ジェームズ・リーニーとジェイ・マクファーソンが中心的存在であったが、カナダの詩界全体が開花するのは、むしろ一九六〇年代に入ってからである。一時期、小新聞、小雑誌、それに新人の詩人が続出したことがあったが、これが大衆的な動きにまで広がっていった。一九六〇年代には、一年間で百冊もの新しい本が発行されている。一九五〇年代の初め頃はこれがほぼ一ダース程度だったのであるから、いかに目ざましい隆盛であるかがわかっていようものである。一九六〇年代には五百人をこえる数の詩人がきちんとした本の形で作品を発表した。その多くはあまり大きな意味を持たなかったが、それでも驚くほど大勢の優秀な詩人が出現した。主な詩人の名前をあげただけでも、カナダの詩界がいかに豊富



な陣容であるかがわかるであろう。しかもその詩風はきわめて多様であって、ジョン・グラスコのアイロニックな古典主義、ポー・ニコルの具体的なイデオロム、アル・パーデイの口語体の饒舌、マーガレット・アトウッドの碑銘のごとき縮まった語法、とあらゆる試みが含まれている。そのほか定評ある詩人としては、フリス・ウエブ、レオナード・コーヘン、マーガレット・アビソン、オールデン・ノーラン、グウェンドリン・マキューエン、ジョージ・パワリングがいる。独創的な若手詩人には、スーザン・マスケグ、デーブル・ジューロス、シド・マートイ、トム・ウエイマン、マイケル・オンダーチェ、パトリック・レーン、マイケル・オンダーチェ、パトリック・レーンをあげることができよう。この新しく出た真正銘の詩人たちに共通のテーマがあるとすれば、それはこの国の地理的特質と歴史の残響に対する深い感情であろう。かつては散文、しかも陰気な散文しか生まなかったように見える大平原のきびしい自然の中で詩が興隆したことに、このことがきわめてはっきりと示されている。

カ ナダの小説が、その土地の生活が求めるものに強く呼応するひとつの

ジャンルとして確立されたのは、まさにこの大平原地帯においてであった。カナダ小説史上、最初の主要作家といえば、フレデリック・フィリップ・グロープであろう。彼の前歴は長い間謎とされてきたが、最近になって、カナダに移る前はドイツで小説家フェリックス・ポール・グリーブとして活動していたことがわかった。一九〇九年にどういわけか突然ドイツから姿を消し、三年後にひょっこりマニトバの学校の教師となって現われている。カナダ人としてグロープは二冊のエッセイを書いた。「平原の小道の彼方に」(一九二二年)および「年の曲がり角」(一九二三年)がそれで、大平原の自然のもつ美と恐怖をよく表現したものである。現在でも最高の作品といえるであろう。これに続いて彼は、開拓農民たちの自然と自己の感情とに対する闘いを描いた一連の小説を次々と発表した。これらは少々の欠点はあるが、力強い作品であることは間違いない。中でも「前進する移住者」(一九二五年)は、彼の暗い自然主義的な存在観を最もよく表現している。しかしながらグロープは、完全な自然主義者であるにはあまりにも詩的な精神の持ち主であった。彼の最も野心的な、また人によって



カラハンの作品

は最もすぐれた作品といわれているのは、たゆみない機械化の発展を象徴的にうたった叙事詩「水車小屋の主人」(一九四四年)である。

一九三〇年代の作家で、地方を描いた

カラハン



グロープとは対照的に、都市を描き、カナダ人初めて国際的な評価を得たのが、モーリー・カラハンである。カラハンは一九二〇年代に作家としての活動を開始し、一九三〇年代にはたとえ「彼等大地を相続する者」(一九三五年)のような簡潔な道徳寓話を次々と書いた。一種の社会主義的キリスト教主義により、不況時代の社会的沈滞の裏にうかがわれる不思議に詩的なトロントの素顔を描いた作品群である。トロントはカラハンが人生の大半を過ごした町である。これらの作品は、現在においてもカナダの最も記念すべき小説の部類に入るであろう。

一九四一年に二冊の古典的な小説が出版され、一人の注目すべき小説家の誕生を見た。小説の方は、シンクレア・ロスの「私と私の家」およびヒュー・マクレナンの「気圧計上昇」の二作品である。「私と私の家」は芸術的にもかなりすぐれた作品で、バランスのとれた形式といえ、風と土埃の只中に孤立した平原の開拓村の雰囲気をよくとらえていることといい、また、土くさい開拓者精神からようやく抜け出しつつあった頃のカナダに生まれた芸術家の苦悩を早くもとりあげたことといい、カナダ文学史上の古典に残留意義は十分持っている。しかしロスの以後の作品には、「私と私の家」で期待させたようなものは生まれなかった。他方、ヒュー・マクレナンは前作以後も次々と作品を発表した。これらはいずれも文学的価値のためというよりも(一九五一年の「各人の息子」はカナダで最良の小説に入るが)、カナダ人の意識を悩ませているテーマを常に取り上げたために、一九四〇年代ならびに一九五〇年代のカナダ文学界を支配した作品となった。たとえば、フランス系カナダ人とイギリス系カナダ人の関係を扱った「一つの孤独」(一九四五年)、カナダとアメリカの関係を追求した「断崖」(一九四八年)などがその好例である。マクレナンの欠点は、間違いなくすぐれたエッセイストである

マクレナンの「気圧計上昇」



彼が、エッセイ風に小説を書くことが多く、一度も新しい実験を試みたことがないという点にある。

マクレナンの保守的な技法はそれ以後のカナダ小説界の主流をなしたが、一九五〇年代後半に入ると、シェイラ・ワイソンがその唯一の作品「ダブル・フック」(一九五九年)において、以後のカナダ小説の一要素となった幻想的な傾向を確立した。もうひとつの傾向はエセル・ウィルソン(「沼地の天使」、一九五四年)が作った。筋立てに気を使いすぎると人生の意味に盲目になるということを、彼女はアイロニーに

満ちた優雅さで示した。モデカイ・リックラーの風俗風刺もひとつ



「ダディ・クラビッツの徒弟時代」

の傾向である。リックラーは初期の自然主義的な作品数編を書いた後、この風刺的な傾向を打ち出し、代表作「ダディ・クラビッツの徒弟時代」(一九五九年)ではこれにファンタジーの傾向を付け加えた。だがシェイラ・ワトソンとエセル・ウィルソンはそれから約二〇年間も黙したまま語らず、リックラーも書くのがだんだん苦しくなってきたようである。このような状況から、一九六〇年代、七〇年代のカナダの主流小説家をあげると、マーガレット・ローレンス(「占いや者」、一九七四年、は平

ローレンスの作品



原生活を描いた一連の素晴らしい作品の中の最高、ロバートソン・デービス(「五

番目のビジネス」、一九七〇年、は豊かな形而上派になったアイロニスト)、マーガレット・アトウッド(「食べられる女」、一九六九年、「浮上」、一九七二年、などの作品は神経症的なフロンティアをがっしりとした手法で扱っている)などがある。その他、マッド・コーエン、マリアン・エンジェル、オードリー・トーマス、ヒュー・フッド、ルディ・ウィーブ、ロバート・クローチなども活躍しており、彼らの最近の作品を見ると、カナダ小



モデカイ・リックラー



説界が詩の世界ほどの量的賑わいではないにしろ、多様性と質において、また詩とファンタジーとの間をさまようような形式上の（デーブ・ゴッドフリーらに見られる声高のナシヨナリズムや、無政府主義的な社会批判もいくらか加えた）実験的試みにおいて、はかりしれぬ程豊かになっているのがわかる。あるいはカナダに十五年間暮し、未だにその影響の尾を引いているマルコム・ローリーも忘れてはならない存在だろう。ローリーはカナダにいる



アトウッド「浮上」

間に「火山のふもとで」の最終稿を書き、バンクーバーに近い美しい生活環境に触発された多くの著作を残した。没後に出版された短編集「神よ、汝の住みし天より我等の声を聞き給え」、（一九六一年）、長編小説「ガブリアオラへ行く十月の連絡船」（一九七〇年）などがそれぞれである。

戯

曲の分野に目を転じると、その創作は実際に上演されるかどうかというところが大きな制約条件になった。一九六〇年代になるまでロバートソン・デービスなどの少数の例外を除けば、舞台劇

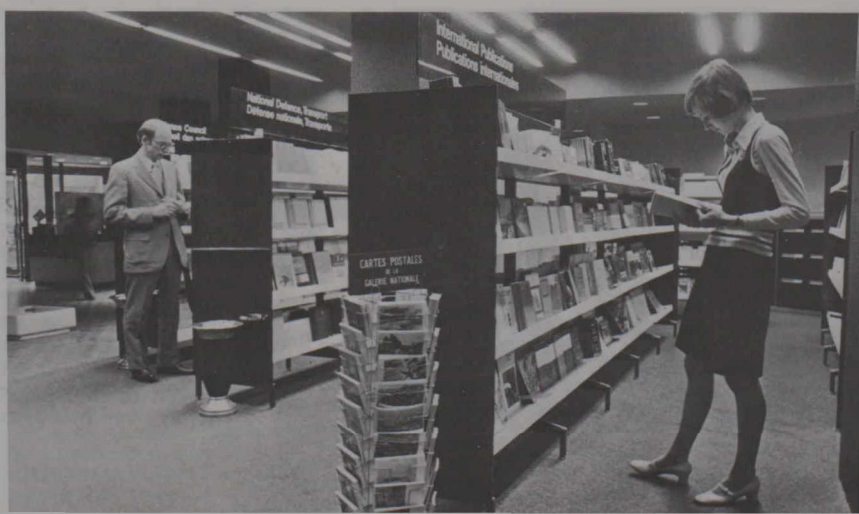
の戯曲はほとんど書かれなかった。戯曲の創作活動が続けてこられたのは、CBC（カナダ放送協会）がラジオ劇の脚本を依頼したからである。何千本ものラジオドラマ脚本が書かれているが、本になったのはほんの少数である。

一方、劇場の数は一九五〇年代頃から非常に増えてきたが、劇作家はラジオドラマからの方向転換に慎重であり、劇場監督もまた、ヨーロッパの古典劇や近代劇に需要があることに満足して、カナダ作家のものをあえてとり入れようとはしなかった。しかしそうした状況も、近年になって変わりつつあり、特にカナダ・カウンシル（カナダ文化振興会）が財政的・精神的援助を与えるようになってからは、実験的な小劇場が全国各地に見られるようになった。これによって英系カナダでは、興味ある劇作家が多数生まれている。主な劇作家の一人に、詩人のジュームズ・リーニーがいる。リーニーは最近、それまでの叙情詩をやめてほぼ完全に実験的な詩劇（「暗闇の中の色」、一九六七年など）やオペラ（「夜に花開くサボテン」、一九六二年など）に転向した。そのほか、ここ二〇年の間にカナダの演劇界に功のあつた劇作家には、ジョン・コールター（「ルイ・リエルの裁判」、一九六七年）、シャロン・ポロック（「ウォルシュ」、一九七三年）、キャロル・ホルト（「パット・アロー・ジャンプ」、一九七二年）、ジョージ・ライガ（「リタ・ジョーの恍惚」、一九六七年）、デービッド・フリーマン（「クリープ」、一九七二年）、ジョン・ハーバート（「幸運と人の眼」、一九六七年に国際的好評を得た）らがい

る。ラジオ・ドラマの方は、すでにCBCの後援がなくなったのが大きな原因となって、衰退の方向を辿っている。テレビ・ドラマは、ついで興味ある形式として発展しなかった。

最

後に残された文学ジャンルとして、文学批評について述べねばなるまい。文学批評は、文学の発展には欠かせないがカナダでは一九四〇年代までほとんど存在しなかったといつてよい。一九二八年に詩人のA・J・M・スミスは「カナディアン・フォーラム」に有名なエッセイを発表した。「求む——カナダ文学批評」という題のついたそのエッセイの中で、スミスは当時行われていた書評を皮相的だとして手厳しく非難し、「芸術家の基本的な位置を見きわめる」ような哲学的な批評を要求した。それに対し、彼の友人で詩人仲間のF・R・スコットが、それは春先に収穫を望むようなものだと非難したが、まさにスコットの言う通り真剣な文学批評が多少なりともカナダの土壌に育ちはじめるまでには、詩人ならばに小説家たちによってさらに多くの作品が生み出されなければならなかったのである。一九四三年は重要な意味をもつ。その年、E・K・ブラウンが深遠な研究



の成果「カナダの詩について」を出版し、A・J・M・スミスも「カナダの詩」を出した。スミスの本に収録されたものを見ると、これが単なる詩集にとどまらないことがわかる。詩を選択する原理、またすぐれた評論および文学史となっている序論部分において、カナダの文学が辿っている幾つかの流れを明らかにし、文学の評価基準を示したものである。一九三六年、「トロント大学クォーター」に、その年のあらゆる文学ジャンルで発表された作品を載せた、年一回の「カナダの文学」という欄が登場した。この文学時評は、詩の項目をノースロップ・フライが担当しはじめた一九五〇年代初め頃から、大きな影響力を持ちはじめた。

ケベック文学の現状

ジョルジュ・ユリエール・ジェルマン

フライは当時も今も、カナダにおいて新時代を画する偉大な批評家である。彼には文学全般を扱った「恐るべきシンメトリ」(一九四七年)や「批評の解剖」(一九五七年)の秀作があり、なかでもとくに「アッシュ・ガーデン——カナダのイマジネーションに関するエッセイ」(一九七一年)は高い評価を得ている。

一九五〇年代に入るまで、カナダの文学批評が貧困であった理由のひとつは、批評家たちが発表討論などの実践活動を通してその洞察力を錬磨できるような場、すなわちカナダの文学作品を専門にした

雑誌が全く存在しなかったことにある。したがって、一九五九年に学者の作品も作家の作品も掲載するジョージ・ウッドコック編集の批評誌「カナダ文学」が発行されたことは、カナダ文学史上の大転換とされている。それはまさに、真剣な文学時評の始まり(現在ではこの種の雑誌はほかに六種類出されている)であり、一九六〇、七〇年代を明確な伝統をもつ

たカナダ文学の成熟期として歴史に記したのである。

いかなる伝統でも、最終的な評価は、歴史家の参加をまっしてはじめてなされるものである。一九六五年に、一群の学者が執筆し、カール・F・クリンクが編集した労作「カナダ文学史」が出版された。一九七六年には第二版が発行され、一九六〇年代、一九七〇年代の創造的高潮期を一冊の本にまとめた。ノースロップ・フライが初版に書いた「結語」は、文学史のもつ時間上、空間上の限界を冷静に

算定し、その限界が如何にして創造的に克服されたかを示している点で、おそらくカナダ文学史上最もすぐれた論文であるといえよう。

ジョージ・ウッドコック 雑誌「カナダ文学」の創立者で、その編集長。リックラーやマクレナンに関する本や「Odysseus Ever Returning」(一九七〇年)と題する文学評論集などの著書のほか、「A Choice of Critics」(一九六六年)「The Sixties」(一九六九年)などの編書がある。(本紙十四ページ「ジョージ・ウッドコック——カナダのアナーキスト」を参照)

この十年間、ケベックの作家たちには——ジャンソン作者、映画制作者と同様に——語るべきことが実にたくさんあった。作家たちは作品の中で、自分の国を探し求め、創造し、記述した。この作業は、生まれてまもない若い文学が、常に最初に取組む仕事だ。「わが小説家の作品を読むことは、われわれの住む世界を読み取るようなものだ」とは、モントリオール大学フランス文学教授であり、ケベックの有力紙「ル・ドゥボワール」の文芸批評家でもあるジル・マルコットの

ガブリエル・ロワ
「Enchanted Summer」



土地への愛着であり、先祖たちの武骨な生きざまである。また、ガブリエル・ロ

言葉である。

事実、ルイ・エモンやフェリックス・アントワヌ・サバル、リンゲ、クロード・アンリ・グリニオンといった人々の作品を読むと、私の祖父の生きた世界がまざまざと目に浮んでくる。それは、

ワヤロジェ・ルムランの作品を読むと、父の世界が、伝統的文明の終焉と苦痛にみちた都市文明への移行の時代が、眼前に迫ってくる。

フランス系カナダの文学は、一九六〇年代初期に至るまで、カナダ文化の中できわめて辺境の存在であった。ケベックの伝統的なカレッジでは、文学といえは圧倒的にフランス文学であった。コルネーユ、ラシーヌ、ユーゴー、ミュッセ、ボードレール、ランボー、ブルースト、それに二〇世紀のカトリック作家(クロ

ードル、プロイ、モリーヤックその他)など、古今のフランス作家が顔を並べ、私がい九六四年に二〇歳で大学を卒業したときも、「正規の授業」ではエミール・ネリガン、ガブリエル・ロワ、イブ・テリヨーといった名前はついぞ耳にしたことがなかった。現実にはテリヨーの素晴らしい小説「Agaguk」が、その四年前に



ガブリエル・ロワ

すでにドイツ語、ポルトガル語、日本語など、いくつかの国語に翻訳され、評価を受けていたにもかかわらず、である。

だがそれも、目まぐるしいほどの速さで変わろうとしていた。すでに「静かな革命」が始まり、われわれはデュプレシ―政権時代のいわゆる「大いなる暗闇」ともすでにおさらばした。有名な「雷電チーム」――ジャン・ルサーージュ、ポール・ジェラン、ラジヨワ、ルネ・レベックの活発な三人組が（ケベックの）主人はわれわれだ」という声にこたえ、政権の座についていた。今やわれわれの間で話されることといえば、ナシヨナリゼーション（国有化）であり、独立であり、ケベック的なるもの」についてだった。そしてケベックの文学も、歌や映画と並んで、流行のひとつになったのである。

ケベック州では一九六〇年代に、学校制度の再建や教職員の再編成など、いくつかの重要な社会的変革がなされた。自ら教職にあった修道士ジャン・ポール・デビアンが書いた「The Imperitences of Brother Anonymous（無名の修道士の出しやばり）」という本が、州の旧式な社会制度や宗教制度、教育制度を大々的に再検討する基礎となった。この本は鋭いユーモアにあふれ、何よりも州の教育制度の欠点を痛烈に批判した。本は未曾有の売れ行きを示した。そして、何もかもが一度に動きだした――教会でも、学校でも、政治においても。大学ではケベックの作家達を熱心に研究しだした。

小説家も新しい世代の活躍が、十年あるいは十二年前頃から目立ってきた。一九七六年三月に物故したユベール・アク

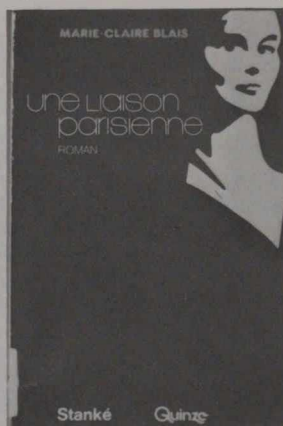
ワンは素晴らしい政治小説「Prochain Episode（次のエピソード）」を一九六五年に出版し、レジャン・デュシャルムは一九六六年に幻想的な作品「The Swallower Swallowed」を出した。同じ年、少女時代の貧困を描いたマリー・クレール・プレの「A Season in the Life of Emmanuel（エマニュエルの人生における一時期）」が、フランスのメジチ賞を獲得した。翌年にはジャック・ゴドゥブーの「Henri Galerneau」が出版され、続いて一九六八年にはロシュ・キャリエの「La Guerre, yes sir」（はい、戦争であります）」の出版を見た（ちなみに、以上の小説はすべて英訳されている）。ケベック文学は、スター作家や批評家、研究者も揃い、また読者もふえて、ここに発展期を迎えた。クロード・ペロカン、ギャストン・ミロン、ジル・ビニョールなどの詩人は、ちょうどアメリカにおけるギンズバーグやデイランのように、一般の人々に愛されるヒーローとなった。

一九六〇年代は、詩人の活動（ポール・マリイ・ラポワント、フェルナン・ウレット、アルフォンス・ビシエら）も相



マリー・クレール・プレ

プレの「Une liaison parisienne」



変わらず続いていたが、文学の主流となつたのは小説である。小説の占める社会的役割、文学上の位置が詩よりもずっと大きいということに関しては、明らかだと思われる。詩については、大衆から遊離している、門を固く閉ざし、アカデミックな専門家しか関心対象に入れていないと、して批判されることが多かった。

それ以後の十五年間というものは、小説は、ジル・マルコットの言葉を借りれば、ケベックの脈動を伝える最良の読物になった。また、ケベックの人々に最も人気のあつた読物も、この州の小説だった。そういう小説は、もちろんわれわれの父親たちがラジオで聴いたものとは違う。それは「静かな革命」の産物であり、その後大きな変化をとげた。

過去においては、たとえばガブリエル、ロワランゲなどの小説は歴史上の事実、大恐慌や戦後の社会現実をそのまま反映していた。実際にあつたこと、すでに十分知られ、広く経験されていることを、そのまま再現しただけだったが、六〇年代、七〇年代の歴史的、社会的な怒濤の時期、古い価値がくつがえされ新しく創り直された時代の中で、小説は歴史に調和するだけの存在ではなくなった。日々新しい歴史が創られ、ケベックの歴史は、

ケベック社会におけるあらゆることごとと同じように、論議の対象にされていたからである。そこで小説は、単なる過去の再現ではなく、小説自身が社会と同じ苦悶と波乱を生き、経験するようになった。

例をあげよう。ジュラール・ベセットの描く主人公たち（「Not For Every Eye」の本屋とか「La Commensale」の事務員、「La Bagarre」のジュール・ルブフなど）は、すべてのケベック人と同じように、自己の歴史の中で常に居心地の悪い思いをしている。マリー・クレール・プレやレジャン・デュシャルム、アン・エペール、ビクトル・レヴィ・ポリーユ、アンドレ・マジヨールらの作品の主人公にしても、ジャック・ゴドブーやロジェ・フルニエの初期の作品の主人公にしても、彼らを生んだ社会の姿そのままに、途方にくれ、根無し草で、不完全な存在である。

「何かが起こつたのだ、僕たちの予想もしなかつた、今でもまだ完全には理解してない何事が…」と「Le Roman à l'imparfait」の中でマルコットは書いている。ケベックの小説はますます豊かで、内容的にも文体的にもかつてないほどよくなってきた。しかしそれと同時に、われわれの歴史における諸関係を「人間劇」という形式の中に表現するという本来与えられた課題からは遊離してしまつたように思われる。多少とまどいはあるにせよ、ランゲの「Thirty Acres（三十エーカー）」やガブリエル・ロワの「The Tin Flute（ブリキの笛）」の中に、われわれ自身の姿を認めるにやぶさかではな



いし、アンドレ・ランジュバンの「*Dest Over the City*」でさえ親近感を抱く。だが、デュシヤルムの「*The Swallower Swallowed*」やアブレの「*A Season in the Life of Emmanuel*」のような大げさな——無法とさえいえる——作品に対しては、そんなに心の底からこれを受け入れるとはとても言いがたい。

アイテンテイテイの危機、独立への動きなどにより根底から揺さぶられている社会にあつては、作家がかつての小説の特徴であつた堅実、安全、真実といった印象を与えることはできなくなったのである。

ここ数年の政治的事件、社会的変化は、小説界にも変化をもたらした。一九七六年のケベック党政権の誕生も、また影響を及ぼすだろう。モントリオール国際ブックフェアを組織したJ・R・Z・レオン・パトゥノードがまさしく言ったように、「今やわが作家たちが権力を握っている」のだ。

すでにいくつかの変化が見られる。一昨年十一月十五日の選挙以後、政治的独立を唱えた本も、北米社会全体あるいは

もつと広く世界のフランス語圏全体の中で新生ケベック社会がどんな役割を果せるかなど、新しいケベック社会を論じた本が多数出版された。これらを眺めるとき目につく共通の特徴は、全体の調子は過去のものより穏やかで、一九五〇年代の論客のように独断と攻撃性に満ちた分析をしていない点であろう。危機はすでに過ぎ去り、反省の時機に入ったのかもしれない。

別の現象もある。レ・エディション・カンズ社の重役で、精力的な若手出版業者であるピエール・テュルジョンの指摘するところによれば、「ジュワール（フランス語系カナダ人のスラング的フランス語）がだんだんと姿を消してきた。先シーズンに送られてきた原稿は、大半が正統なフランス語で書かれている。要するにスラングには皆がもううんざりしているのだ。初めの頃は政治的に有用だったスラングだが、今では特にその意味はなくなったのである。

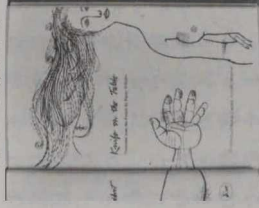
小説の主人公も、新しいタイプがあらわれてきている。たとえば、ジャック・ゴドブーの最新作「*Le Dragon*」やロジエ・フルニエの最新作「*Les Cornes Secrètes*」がそうだ。いずれもベセツトやデュシヤルムの「アンチ・ノベル」とは、属する時期も世界も違う。フルニエは次のように筆者に語った。「僕の初期の作品では、いつも主人公を最後に死なせていた。それが自然であり、不可避なことだと思われたからだ。ところが「*Les Cornes Secrètes*」は勝利者の話だ。僕は神話的な英雄、超人的英雄が必要だと感じて、古典文学でお目にかか

るような英雄を創り出した。「*Les Cornes Secrètes*」は詩的な寓話ともいえる小説で、とにかく楽しく、異教的で、ひどく生き生きとしている。フランスの批評家はこれを高く評価して、フルニエを「ケベック人最初の偉大な作家」と呼んだほどである。

ケベックの出版界はフランスと大きな競合関係にあるが、それでもかつてないほど活況を呈している。この点では、英米の出版業界と厳しい競合関係にある英語系カナダの出版界の状況に問題が似通っている。

ケベック州の出版業者は、もうひとつの重要な文学活動の面にも活発に組みはじめた。つまり米国や英語系カナダで出版された本をフランス語に翻訳出版す

ゴドブーの作品から



る仕事である。昨年、アラン・スタンケ・インタナショナル社は、ジェームズ・フエラン著「*Howard Hughes: The Hidden Years*」（ハワード・ヒュース——「隠された年月」）の世界中の仏訳権を買いとつたし、米国の前大統領リチャード・ニクソンの回想録に関しても同様の権利をオプション契約した。エディション・カンズ社も最近、「ロッキ」のフランス語版を出し、これはケベック州でもフランスでもよく売れている。そのほか、セルクル・デュ・リアル・ド・フランス社では、英語系カナダの作家、ロバート・ソン・デービスやモトリー・カラハン、W・O・ミッチェルなどの古典を仏訳し

た「コレクション・ドゥー・ソリタチエード（一つの孤独選集）」を出版している。

「ケベックの出版業者が文学作品だけを扱うというのは、事実上不可能なことだ」とピエール・テュルジョンは語る。

「出版物の多様化は絶対に必要だ。実用的なガイドブックや料理の本などは常によく売れる。そこから得た収益で、出版業者は才能ある若手作家の作品を世に出すというリスクにも、あえて挑むことができる。」

純粋に金銭的な面からいえば、文学作品の出版は、実用本のベストセラーによって支えられているということになる。しかしながら創造性という面では、ケベック文学はすでに自主独立を達成し、そして世界のフランス語圏に認められつつある。英語系カナダにおいても、翻訳のおかげで、ケベック作家（小説家や詩人たち）の作品が次第にその存在を知られるようになってきた。ケベック文学は、漸くにして陽のあたる場所に出る準備をしはじめた。それは、フランス語系カナダのイメージに合う場所——つまりアメリカとヨーロッパの巨人たちの間にはさまれて、歴史が産んだたつた五百万という民族に合う場所かもしれない。だがこれはまことに地の利を得た場所でもあつて、西欧の偉大な文化の中に、独自の、いわば特権的な視点を与える意義を持っている。

（ジョルジュ・ル・エーベル・ジエルマンはモントリオールの「ラ・プレス」紙のコラムニスト）

ベスューン問題

平野 敬一



平野敬一氏

このほどR・スチュワート著『医師ベスューンの一生』が、阪谷芳直氏のていねいな翻訳で岩波現代選書の一冊として世に出た。久しくカナダ文学におけるベスューン問題に深い関心を抱いてきた一人として、多少の感慨なきをえない。

あれは確か一九六五年の一月。カナダCBC放送のテレビ番組でD・プリテンとJ・ケメニー共同制作のノーマン・ベスューンのドキュメンタリーが放映されるという画期的なできごとが起こった。

当時のタイム誌(カナダ版)や地元の新聞も一応この「できごと」を取り上げはしたが、なぜそれが画期的なことかという点を充分説明してはくれなかった。とにかく、当時オタワに滞在して大学でカナダ文学を講じていた私は、この番組に登場するベスューンの姿や、M・ケーンの朗読によるベスューンの文章の引用に名状し難い感銘を受けたものだった。カナダの社会も変ってきた——ベスューンがこのように大っぴらに紹介されるようになったのだから、と私は新しい時代の曙光のよなものをこの番組(というよりこの番組が放映されたという事実)から感じとった。

というのは、当時、私はベスューンのごとで、だいたふ業を煮やし、もう匙を投げたいような苛立った気持ちになっていたからである。ちょうどその頃、大学で担当していたカナダ文学の講義で、私はヒュー・マクレナンの作品を扱っていたのであるが、マクレナンの近作(当時としては)『夜の終わりのとき』(一九五九)の主人公ジェローム・マルテルと実在したノーマン・ベスューンの関係をはっきり

させないことには、マクレナンの文学観や社会観をいくら論じても始まらないのではないかと苛立った思い(いまでもその思いは変わらない)から、ノーマン・ベスューンの資料を私なりに調べ、教室でマクレナンのこの作品と関連させて解説を試みていた。そのとき逢着した有形無形のフラストレーションを、私はいまでも忘れることはできない。

自分の苛立ちについて立入る前に、マクレナンの作品を少し解説する必要があるだろう。『夜の終わりのとき』はカナダ総督賞を取得したマクレナンの大作としてカナダではよく知られた作品であるが、多くのカナダ文学の作品の例にもれず、日本では未翻訳、未紹介なので、ここでごく大筋だけを述べてみよう——高名なモントリオールの外科医ジェローム・マルテルは、一九三〇年末に共和国側支援のためにスペインへ赴くが、ファシスト側に捕えられ、消息を絶つてから久しい。ところが一九五〇年代初期のある冬の日、マルテルは突然、モントリオールに姿を現わす。彼は、ファシスト側に捕えられたから、ドイツ、ポーランド、ロシア、中国と獄中を転々として筆舌に尽くし難い艱難を味わってきたのだ。マルテルの妻キャサリーヌは夫が死亡したものと信じ、ラジオ解説家(そしてこの作品の語り手)であるジョージ・スチュワートと再婚しているのだが、思いがけないマルテルの帰国のショックが病身にこたえ、スチュワート夫婦は重大な危機に直面する。しかし、さまざまな苦難を経て、いまや身体でなく精神の医者となったマルテルは、夫婦を助けてこの危機を乗り越

えさせ、またいざことなく立ち去っていく、という筋立てである。主人公マルテルの描写に炯眼の人は、ベスューンの姿をみるだろう。

実際の作品はマルテルの生い立ちから始まり、話をもっと屈折しているが、大筋は、ほぼ以上の通りである。再び、私の苛立ちへ戻ることにしよう。

苛立ちのきっかけとなったのは、当時のカナダの大学生のほとんど誰一人としてノーマン・ベスューンの名前を知らなかったという、私にとっては衝撃的な事実だった。ベスューンといっても、全然ピンと来ないのである。聞いたこともないという。一九六〇年代前半の大学生としては、それはむりのないことだったかもしれない。こんど翻訳された『医師ベスューンの一生』の序をみると、原作者スチュワートがベスューンに関心をもちだした一九六九年になつても、カナダ史の教科書にベスューンの記載は一行もなかったというのだから。歴史家スチュワートにとつても、ベスューンの名は、最初、きわめて漠然としたイメージしか喚起しなかったようである。六五年に私を感銘させたベスューンのテレビ番組も、どうやらカナダの社会にあまりインパクトはなかつたらしい。もともとこのんびりしたカナダの学生たちのベスューンについての無知と無反応に私が苛立つたりしたのは、少々性急すぎたかもしれない。私を苛立たせたのは学生たちだけではなかつた。スチュワートも序文で引合ひに出しているベスューンの唯一の伝記、T・アランとS・ゴードン共著の『メスと剣』(一九五三)、「医師ノーマン

・ベスューンの偉大なる生涯」、浅野雄三訳、東邦出版社、一九七四年が参照資料としてどうしても必要なのに、一国の首都オタワでどういふわけか手に入らないのである。いまでこそベスューン復権のおかげで、同書の紙装版は容易に入手できるようになったが、当時は、ポストンとトロントで同時発行になった(はずの)この本が、大学の図書館にも市の公立図書館にも蔵されていないというお粗末さだった。ようやく国立図書館に一部あることが目録で判明し、インター・ライブラリー・ローンとやらで貸出しの手続きをとったまではよかったが、現物は私のオタワ滞在中にとうとう手もとに届かなかつた。さいわい、ポストン出版のアメリカ版をトロントの古本屋でみつけることができて、なんとか当座の間に合わせることはできたものの、ベスューンの伝記(しかも自国出版の)が、どうしてあのようにきれいさっぱりと本屋の書棚や図



書館から姿を消してしまつたのか、ふしぎなことだと思つた。私は、いまでも、それをたんなる偶然とは思えないのである。ベスューンごときものの伝記、特にアランとゴードンの共著は、(わが文部省の口調を借りるなら)「公序良俗に反する」ものとみられ、事実上禁書に近い処遇を受

カナダ文学と

けていたのではないかと思う。

というわけで、実在したベスユーンとマクレナンの作品の主人公マルテルを比べてみる、と学生たちにこちらがいくら要求してみたところで、学生たちには、両者を比べる手だてがなかったのである。このように実在のベスユーンが霧に包まれたまま、いや人の意識から抹殺されたまま、『夜の終わりのとき』の主人公マルテルについて、やれこの人物は神話的巨人であるとか、やれ現代の超人だといった賞辞が相次ぐというカナダ批評界の提灯持ちの状況も、私の苛立ちに拍車をかけることとなった。

私は推理ものを解くように、実在したベスユーンの生き方の軌跡と小説に描かれたマルテルの生き方を仔細に比べ、簡単にして明快な結論に到達したのである。つまり、小説の主人公マルテルは実在人物のベスユーンをモデルにしなが

ら、それを変容し、矮小化し、歪曲し、一般読者（つまり「公序良俗」）の理解力と好みに合わせた、いわば実在人物のポピュラー版にすぎない、という結論なのである。私は教室でもこの見解を披瀝し、論文にも発表した。もちろん当然のマクレナンは、予想通りムキになって（気色ばんでという感じだった）、わざわざ手紙を寄こして

私の解釈を否定してきた。いまでもマクレナンは、ベスユーンのことを質問されると、とたんに口を緘じて不機嫌になるという（スチュワート氏から筆者あての私信による）。よほどベスユーンの問題に触れられるのが嫌いだとみえる。このように原作者の賛同を得ることのできなかった私の論証も、いくらか説得力があるとみえて、P.ゲッチ編『ヒュー・マクレナン』（トロント、一九七二年）にその大部分が収録されており、いくつかのカナダ文学研究書の書誌の中に参考文献として挙げられるようになった。私の苛立ちの必要も少しは減じたかにみえる。

私がかつて行なった論証の過程をここで詳述する紙数はないが、実在人物ベスユーンと作中人物マルテルの共通（類似）点の一部だけを挙げるなら、（一）どちらもモンリオールの名外科医という高い社会的地位を抛ってスペイン戦争の共和国側に馳せ参じる（これがいちばん大事な基本パターン）、（二）どちらも第一次大戦に従軍し、二人とも大腿部に負傷する、（三）どちらもフレンチ・ユグノー系である、（四）どちらも結婚生活が破綻する、（五）どちらも医療の社会面経済面を重視する、などなど細部に若干の違いはあるものの、おどろくほど一致点が多い。性格の描写になると外面よりもっと類似が目だつ。これをすべて偶然の一致といいきれるのだろうか。マクレナンはベスユーンのことをまったく意識せずにマルテルという人物を独自に造型しえたのだろうか。三十年代にモンリオールで教鞭をとり、医師ベスユーンの噂をいやと

いほど聞かされたに違いないマクレナ



ンの場合、これは考えられないことである。

アランとゴードン共著のベスユーン伝が世に出たのは一九五二年。マクレナンの『夜の終わりのとき』の公刊は一九五九年となっている。『夜の終わりのとき』を書くのに六年から八年かかったと作者自身が述懐しているのだから、マクレナンがベスユーン伝の主人公を、自分の作品の主人公として作者も読者も納得がいくように仕立て直すのに、ちやうどそれだけの時日を要したのだと推定しても必ずしも無理ではなかろう。それで計算が合うのである。アラン、ゴードンの『メスと剣と』を読んだとき、こういうベスユーン像では困る、という思いがマクレナンの脳裡をかすめたに違いない（と私は推定する）。

文学作品の作中人物に実在のモデルがあれば、作中人物がそれに類似するのはむしろ自然であろう。また作者の解釈によつて、実在人物から作中人物があるていど離れていくのは、これまたきわめて自然なことである。しかし、当初から私の気になり、私が問題にしてきたのは、自分の作品の作中人物にふさわしくなるように、実在人物（ベスユーン）に改変を加えていく作者の終始変わらぬ一貫性だった。そしてその一貫性の中に、私は作者マクレナンの素顔がのぞいているよ

うに思えた。マクレナンは、たとえばこういう変え方をする。実在人物のベスユーンがスペイン戦争に参加するのは、冷静な確固とした信念があつたから（しかもこの信念は終生変わらなかつた）であるが、それに対し作中人物マルテルの方は、情熱のおもむくまま、つまり若気の過ちといった形で、しかも病院の看護婦とスキャンダルを起こすというおまけつきで、逃げ出すようにしてスペインへ渡るのである。さらに上述したように、ベスユーンは最後までその政治的信念（ Kommunismus ）を堅持し、なんら幻滅を感じることなく、第八路軍の軍医として中国でその生涯を終るのであるが、マルテルの方は、早くも Kommunismus に幻滅し、身心両面の筆舌に尽くし難い苦難を経たあけく、ある日、突然、獄中でイエス・キリストを再発見し、幼き日の信仰に立ち返る、といういかにも「健全」な通俗小説にあつらえ向きの道を進るのである。両者の軌跡の大筋は右の通りだが、夫婦間の細かい点でも実在のベスユーン夫婦の場合よりは、男（マルテル）の方が悪者に描かれているのである。その結果どうなるかということ、一般読者にとってベスユーンは、なんとも理解し難い「困った」人物であるのに対し（せめて Kommunismus に幻滅でもしてくれたら分かるのに）、マルテルになると、（神話的人物という「定評」のあるこの人物をこう評するのは申しわけないのだが）実に分かり易いのである。一般読者にとって、マルテルがスペイン戦争に参加した次第も、共産主義に幻滅した次第も、イエス・キリストを発見し信仰に立ち返つた次第も、す



アトウッド

カナダ文学の重要テーマ

マーガレット・アトウッド

べて手にとるように分かるのである。

読者はマルテルの苦難に涙しながらも、その墮落（ノ）から救済への歩みに安堵し、共鳴しうるのである。こういうふう

大成しえないものである。

かつての、少なくとも六〇年代前半までのカナダの社会（リスペクタブル

で交わされているのを私は読んだ記憶がある。かつて悪評高いほど保守的で守

に、辞典としての項目の取捨が必ずしも

公正でないことをある書評で指摘したことがある。その後、W・トイ編のこの辞

カナダ文学（英語、仏語とも）にひんぱんに見られるカナダの中心的シンボル

概念も多面的で、かつ適応性のある概念である。初期の探検家や開拓者にとって

は、このようなサバイバルをテーマにしているのが多い。これをただ生き延びる

というところであろう。カナダ人は、ちょうど病人を診察する医者のように、永

の中から得たものはあまりない。

自らの生残に夢中になれば、その生残の障害となっている物にも当然大きな関心を寄せることになる。かつては、陸地とか、気候など、外部的なものが障害物として書かれたが、のちの作品では、障害物は不明瞭で、しかも内向化する傾向がでてきた。障害物はもはや肉体的生残に対するそれではなく、精神的生残とでもいえるもの、人間として生きていく上でぎりぎりの生命に対する障害物としてとらえられるようになったのである。ときにはこのような障害物に対する恐れそのものが障害物になり、登場人物は恐怖(外部から彼に迫っている)と彼が考えている(もの)に対する恐怖、あるいは内部から彼に迫る自分自身の性情に対する恐怖)にとらわれていく。彼らが恐れるのは命そのものかもしれない。生命が生命にとって脅威になると、そこにはいささかの悪循環が生まれる。例えばある男が、足を切断して不具になるしか生きながらえる方法はないと考えたとしたら、サバイバルの代価はきわめて高くつくことになる。

分かり易いように、いくつかのカナダの小説の筋を要約してみた。その中には、生き残ろうとして失敗してしまうものもあるし、ただ生き残るだけのもの、生き残るけれども不具になってしまうものもある。

ブラット著「タイタニック号」船が氷山に衝突し、大半の乗客が溺死してしまう。

ブラット著「アレポーとその修道士たち」打ちひしがれるような苦しみを

へた牧師たちが、つかの間生きのびるが、インディアンに皆殺しにされる。

ローレンス著「石の女神」老女が命に取りすがるように生きてあと、とうとう死んでしまう。

キャリア著「お日様かい、ファイルート」田舎での信じがたい貧困と都会での恐ろしい状況を逃れた主人公が、金銭的に成功しかけるが、車をぶつけて死んでしまう。

マーリン著「死の肋骨の下で」財政的な成功を取めるため自分を精神的に不具にしてしまう主人公が、結局失敗する。

ロス著「私とわが家」自分の仕事を嫌がりながら、それを続けることによつて自分を芸術的に不具にしてしまう大平原の牧師が、最後にそこから逃れるおぼつかない機会を与えられる。

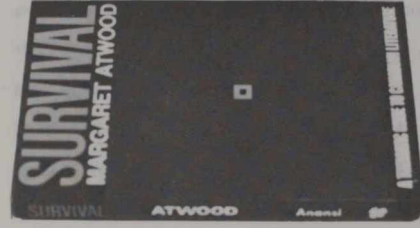
バックラー著「山と谷」書けない作家が、最後に可能性を見出すが、実行する前に死ぬ。

ギブソン著「コミュニオン」人間的接触のできなくなった男が、病気の犬を助けようとするが、失敗し、最後に焼死する。

私が例にあげた筋書きは、小説と詩の両方から選んだものである。しかもカナダのいろいろな地域にまたがり、年代的にも一九三〇年代から七〇年代初期に及んでいる。これらの作品の筋書きは、生存に失敗するとか、ただ生存するだけでそれ以上は何も達成し得ないということが、敵対的な外部世界に押しつけられるのではなく、むしろ自分自身の選択でそうなるという、サバイバルのもつもうひ

とつの側面をどこかで示唆する。生存ということにこだわりすぎると、そこから生存しないという意志が生まれるかもしれないのである。

カナダの作家が、主人公を死なせるか、失敗させるよう、いろいろと心をくたく、ということにははつきりしている。失敗以外に「正しい」結末はあり得ない、それだけが作中人物(あるいは作者)の宇宙観を支持するのだという、意識的または無意識な考えがあるため、失敗させることが絶対に必要なのだということが、カナダの多くの文学作品から感じられる。このような結末がうまく扱われ、しかも作品全体にマッチしておれば、文芸的にその是非を云々することはできない。しかし、カナダの作家がきこちない、あるいは手のこんだ結末を書く場合は、その処理の仕方は肯定的ではなく、否定的な



方向であることが多い。つまり、カナダの作家が創作する主人公には、突然金持ちの叔父さんから遺産がころがりこんだとか、本当は伯爵の息子だったというヒックリする知らせよりは、予想もしなかった災害が起こったり、車の操縦がきかなくなったり、あるいは木や鷹役の人物がでてきて、主人公が「無事に」失敗することの方が多い。なぜこうなるのだろうか。カナダ人には、アメリカ人のもつ勝利への意志と同じほど強く、また広く

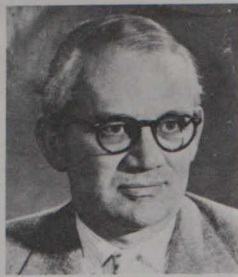
浸透した失敗への意志があるのだろうか。

あるいは、カナダ文学の大半は一〇世紀に入ってから書かれた、そして二〇世紀は一般に悲観的または「アイロニックな」文学を生んだ——カナダはただその傾向を反映したに過ぎない、と言えるかもしれない。また、人生の喜びや楽しみについて、短い叙情詩を書くのは可能でも、ちよつとした長さの小説であればこれだけでは物足りない。純粋な幸せについて述べた小説は、非常に短くでもしなければ、アクビがでてしまう。「昔々、ジョンとメリーはそれからずっと幸せに暮しました。終り」でいいのだ。今述べた議論は、両方ともあるていど的を射ている。にもかかわらず、カナダの裏うつは、他の国々のそれと比べて救いが少なく、死と失敗があまりに多くの割合を占める、ということにある。いろいろなシンボルには、例えば生命の源としての海もあれば船のみ込む海もあり、また成長を示す意味の木もあれば頭上に倒れる木もあるというように、肯定的なものや否定的なものがあるが、カナダ人がそのどちらかを選ぶとなると、否定的なものに対する好みの方が明らかに強い、ということがいえよう。

(Margaret Atwood: Survival, House of Anansi Press Ltd., Toronto, 1972より抜す。マーガレット・アトウッドはカナダで最も有名な詩人、作家の一人で、小説「The Edible Woman」「Surviving」「Lady Oracle」、詩集「The Circle Game」「Procedures for Underground」「Power Politics」「You Are Happy」などの作品がある。)

ジョージ・ウッドコック

—カナダのアナーキスト—



ウッド・コック

ヘンリー・V・ネリス

アナーキズムに関する記事は、一般にあまり歓迎されない。事実、アナーキズムという言葉自体、混沌、つまり無秩序ないしは暴動の可能性をはらんだ混乱と同一視されてきた。もっと不吉なところでは、無意味な暴力、ニヒリズム、テロリズムと同じに見られてきた。いわゆるアナーキストとはフアナティックな、爆弾狂の暗殺者のように一般には思われている。今年六十六歳になるカナダのエッセイスト・詩人・批評家・編集者・放送者・世界旅行家・歴史家・政治思想家ジョージ・ウッドコックは、失われた重要な運動に関するこのようにグロテスクで戯画化された根強いイメージを正そうとして、その一生を捧げ、これまでに四十冊をこえる本を世に送ってきた。

見るからに優しそうな、眼鏡をかけた大学の学監を思わせる風貌のウッドコックは、アナーキズムの歴史と理論にかけては当代一の権威である。彼はまた、カナダの最も刺激的な作家であり、かつ最も多作の作家であることも疑いを入れない。彼は、多くの人が一生かかって読む本の数よりも、もっと多くの本を書く。この国の文学雑誌に彼の書いた記事や評論が載っていない時はなかったくらいだ。本格的な伝記、エッセイ集、文学作品集、旅行記、遠大な歴史研究など、年に一冊——ときには二冊——の割で出版している。これらの他に、彼が二十年前に創刊した季刊誌「カナダ文学」の編集もずっと続

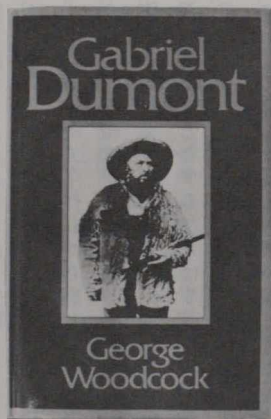
けている。ウッドコックの多作ぶりにはただただ驚くばかりで、その知性の範囲と経験の広さは、他に例を見ない。

ウッドコックは一九一二年、ウィニペグで英国人の移民の子として生まれた。長じてから勉学のためイギリスに渡り、しばらくは大学にも通った。だがいかに個人主義者らしく、自分を教育し鍛えたのは前衛的な文学サークルへの参加によってであり、一九三〇年代後半の急進的な政治を通してであったようだ。第二次大戦中も、彼は活発でとらわれない思想者の雑誌「NOW」を編集して、反戦主義を貫いた。「NOW」は七年間続き、英国のアナーキズムの中心的存在になった。戦後の英国社会では落ち着かず、居心地が悪くなったウッドコックは、一九四九年に再びカナダに戻ってきた。その時以来、バンクーバーを本拠地と定め、ここから世界各地に出かけていたり、ここで多くの著作を書き、時には教壇にも立った。

ウッドコックが英国を去るときには、すでにかなりの文学的名声を得ていた。数冊の詩集と、エッセイ集「The Writer and Politics (作家と政治)」、イギリス王制復古時代の劇作家アフラ・ベン(著作活動で自活した史上最初の女性)の伝記、最初の偉大なインテリ・アナーキスト、ウィリアム・ゴドウィンの研究などが、すでに世に出ていた。カナダに来てからは、自由意志論者とアナーキストの思想史の研究をさらに続けた。他の仕事をやるかたわら、彼はビエール・ジョセフ・ブルードンやクロボトキン、オスカール・ワイルド、ガンジー、それに一九三

〇年代からの友人ハーバート・リードとジョージ・オーウェルといった人々の伝記を書き上げた。中でも彼の業績の頂点に位置するのは、一九六二年に出版された「アナーキズム——自由意志論の思想と運動の歴史」であろう。この労作は今日でもなお、アナーキズムに関して英語で書かれた規範的文献になっている。最近の彼は、文明化の進展に抵抗して自分達の相互扶助主義や協同体社会の方に平和と同胞愛を求めようとした個人や団体、たとえば十八世紀ロシアの平和主義者ドゥカポフ派とか一九世紀末の西部カナダに生きた反逆者の首領ガブリエル・デュモンのような人々に関心を向けている。

だからといってジョージ・ウッドコックは、文献をもとに書物を書き、自分の書齋に閉じこもるようなタイプの学者と

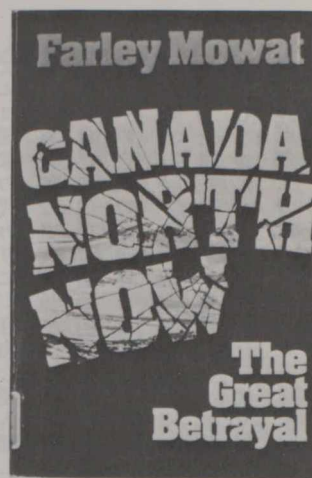


は違う。有名な世界旅行家でもあり、ラテン・アメリカやインド、東南アジア、ミクロネシア、それにカナダ北部などのはるか遠い悠久の伝統文化に深い関心を持つ人間である。十数冊ある旅行記の中で、彼が最も魅せられているのは、たとえばメキシコやインドの農村やクイーン・シャーロット島の部族社会といったような、旅の途上で彼が出逢った自給自足的、自律的な共同社会であった。彼が最

も厳しく糾弾しているのは、近代化論者であり政府の計画立案者であり、とりわけ宣教師に対してである。「ヨーロッパ人でおそらくこれほどひどいことを行なった集団は他にないだろう。奴隷商人でさえ、これほどひどく土着文化を破壊はしなかった。近代西洋文明にはないすぐれた協同感と互助感をしばしばバックにもつ部族生活の経済的社会的パターンを、これほどまでに破壊しはしなかった。」——と彼は書いています。

彼の一般的な歴史研究の中においても、彼はアレキサンダー帝国の生気にあふれた多元主義を称賛し(「インドのギリシヤ人」)、ジョージタウンやシンガポール、香港、上海で見られた自発的な共同社会組織を称賛した(「極東における英国人」)。カナダ史に関しても、広く世に評価されている「カナダとカナダ人」の中において、たとえ錯誤と悲劇の記録を振り返るときでも、ウッドコックは、連邦主義者の理想、多文化社会の理想を祝福している。ある人々にとっては、カナダが生き残っていくにはあまりにも分割されすぎ、組織的統一がない。しかしカナダのそうしたところこそ、ウッドコックが魅かれるところなのである。ウッドコックの眼には逆に、カナダがあまりにも権力主義的で、中央集権化され、官僚化されすぎる危険があると映る。反対に、この国の強い地域主義と連邦制度と多文化主義の中にこそ、希望のしるしを見るのである。「私はカナダが、今日、地球上のどの国にもまして、かつてのスイスの実験を今、革命的方法で行なうことができる国だと信じている。かつてフラン

ファリー・モーワットの世界



エスキモーと インディアンと 狼と フクロウと

ファリー・モーワット。博物学者でユーモア作家。変人。くじらや狼の味方。エスキモーとインディアンの代言人。旅行家。隠とん者。ラム酒の愛飲家。そして受賞作を含む二十四冊もの本の著者。

カナダ北方の美しさ、ドラマ、そして残忍さについて書き続けてきたファリー・モーワットほど、カナダで親しまれている物語作家はおそらくいない。彼の評判は国内だけではない。モーワットの作品はすでに二十四以上の言葉に翻訳され、その発行部数は世界中で三百万を超えて各国の数多くの読者を魅了してきた。一九五二年に最初の作品が出版されて以

来、彼はさまざまな子供や大人向けの本の裏表紙から、もじやもじやの赤ひげに囲まれたあのいたずらっぽそうな顔をのぞかせてきたのである。

モーワットは一九二一年、オンタリオ州ベルビルで生まれた。父親が図書館の司書をしていたため、幼少時代をベルビルからトレントン、ウインザー（いずれもトロント南部の町）と転々としたあと、十二才のときカナダ中部の大平原にあるサスカチュワン州サスカトゥーンに引越した。モーワットはそこでまじめに鳥の観察を始め、ひまがあると川沿いや原っぱ、あるいは自分の家の近くで新種の鳥を探し求めるようになる。

モーワットの家族はのちにトロントへ移ったが、あいかわらず鳥や動物が好きなのは、学校で博物学に熱中した。やがて戦争が始まり、カナダ陸軍に入隊して、イタリア、ベルギー、オランダで戦闘に参加する。戦争が終わると、モーワットはカナダに帰り、北極への旅に出た。自然に対する彼の興味は、すでに純粹に科学的なものから、文学的なものへと変わっていた。

モーワットは、雑誌に北方の人々や動物について書きはじめた。一九五二年に最初の本「People of the Deer」トナカイ族の人々が出版された。この作品はたちまち大評判を呼び、世界的なベストセラーになった。



「トナカイ族の人々」は、モーワットが二年間も一緒に生活を共にしたイハルミウト族エスキモーがテーマになっている。「これらの人びとは」——彼は書いている——「ツンドラ地帯の情容赦のない自然に対する厳しい闘いに、その全力をしばって生きてきた。地理的な障害物は、われわれのようにそれをならしてしまうのではなく、それに順応することによって乗り越えた。」

この作品で成功を収めたモーワットは、次々と本を書き、テレビやラジオにも出演した。これらの中で、彼は強く野性動物の保護を訴え、環境破壊に抗議し、文明がインディアンやエスキモーの伝統的生活様式をいかに破壊してきたかを嘆いた。このため、エスキモーは彼のことを「キブメトナ」——うるさい小犬」とでも訳したらいいだろうか——と称しているほどである。

モーワットを人生の傍観者だと呼ぶ人

はいまい。彼は調査のために国のはてまで旅し、オンタリオ北部に自分で建てた丸太小屋や同州南部の小さな町で古い農家に住み、ニューファンドランドの遠く離れた漁村で暮らし、帆船に乗ってカナダの東部沿岸を回遊したこともある。彼は人生のあらゆる点で行動者であり、そのことが彼をカナダ文壇における最も興味深く、また最も楽しめる人物の一人にしている。

モーワットは、処女作「トナカイ族の人々」のほかに、北方の荒涼地について「Lost in the Barrens」バレンランド脱出作戦」とその後編「The Curse of the Viking Grave」バイキング墓の宝」の二冊を書いている。両方とも孤児ジャミー・マックネアが友達インディアンといろいろ冒険する話で、一応子供向きではあるが、大人でもわくわくしてしまう作品である。モーワットは、いずれもノン・フィクションだといっている。

「フィクション（作りごと）」といううなものがあるとは、私には思えない。私が書くのは、主観的なノン・フィクションだ。事実はおそらくそうだったが、ろう、というところから書くわけだが、いつも現実が基礎になっている。芸術家の仕事は潤色し、集約することにある。しかし誰も新しく何かを作り出すわけではない。私が書くときは、自分を何か別の状況に投入する、つまり自分で（その作品を）生きることになる。「バレンランド脱出作戦」の話は、まさにその作品の通りに自分が生きたいと思った、そういう話だ。」

深海からの救助を扱った「The Grey

Seas Under Ⅱ 灰色の海底」と「The Serpent's Coil Ⅱ 海へびのとぐろ」を書く調査のために、モーワットはニューファンドランドのバートという、外部とは全く隔絶した人口わずか九百人の小さな漁村に住んだ。「The Whale for the Killing Ⅱ そのクジラを殺せ」は、バートの近くで起こった事件に基いている。一九六七年のある日、一頭のひれクジラが礁湖に迷い込んででられなくなった。何人かの地元の人たちは、それに何発もの銃弾を打ち込んで面白がった。モーワットは怒って、海外の報道機関にその事件を伝えた。クジラは傷と飢餓が原因で死んでしまった。モーワットの本に基いて、映画が制作中である。

モーワットの生活自体の中からも、いくつかの作品が生まれた。彼が子供の頃に飼っていた動物のうち、ウイルとウイ



ープスという二ひきのフクロウは「Owl's in the Family Ⅱ 「ぼくとくらしたフクロウたち」で取り上げられたし、犬のマットは「The Dog Who Wouldn't Be Ⅱ 「犬になりたく



なかつた犬」の主人公だ。水もれのスクリュー「幸福な冒険号」のことは、「The Boat Who Wouldn't Float Ⅱ 浮いてくれないボート」に面白おかし

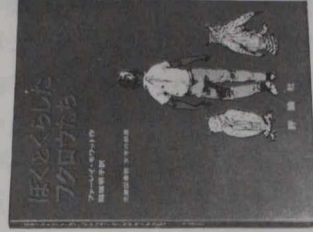
く書かれた。この本で、モーワットは一九七〇年にステファン・リーコック・ユーマア賞をもらっている。

その他の作品は、過去のできごとを記録したものである。初期の作品「The Fighting Ⅱ 連隊」は第二次大戦における彼自身の部隊について書いたもの。カナダの東岸で起きたレイセスター号とフアウンダーション号という二隻の海洋貨物船の沈没事件のことは、「海へびのとぐろ」に書かれている。「Siberia Ⅱ 邦訳甦える大地」は、一九七〇年に、モーワットが一度にわたってシベリアへ旅した後で書いたもので、北方地域を開発、植民しようとするソ連の努力を扱っている。

モーワットの最近の作品は、再びカナダの北極地域をテーマにしている。一九七五年にでた「The Snow Walker Ⅱ 氷上に住む人々」は、エスキモーに関する十一の話を集めたもの。エスキモーの絶え間ない厳しい環境との闘いは、きわめて感動的な物語になっている。隔絶された家族が知恵と勇気によって大吹雪と凍えるような寒さ、それに食糧の欠乏をとるように乗り越えたかを、エスキモーはこの本の中で語っている。一九七六年に出版された「Canada North Now Ⅱ カナダ北方の現況」は、以前でた本を改訂したもので、先史時代から現在までのエスキモーの歴史をたどっているほか、北方開発によつて北極地域の環境と先住民族の生活様式がどんなに被害をこうむってきたかを、熱っぽく書いている。

(モーワットの作品のうち、次のようなものが日本語に翻訳されている。「犬になりたくなかつた犬」、角 邦雄訳、

文芸春秋社、一九七五年、「ぼくと暮らしたフクロウたち」、稲垣明子訳、評論社、一九七二年、「バイキング墓の宝」、久米稯訳、評論社、一九七六年、「甦える大地」、角 邦雄訳、読売新聞社、一九七四年、「オオカミよ、なげくな」(「Never Cry Wolf」)、小原秀雄・根津真幸訳、紀伊国屋書店、一九七七年、「ジャミーとアワジンのバレンランド脱出作戦」(「Lost in the Barrens」)、久米稯訳、評論社、一九七四年)。



子ども向けの本から

●ジャン・リットル「Listen for the Singing Ⅱ ほら聞えるでしょう、歌声が」(Dutton and Clarke-Irwin 発行、一九七七年)。

目が不自由なアンナとドイツからカナダに移住してきた彼女の家族の物語。ときは第二次世界大戦が始まった一九三九年。(昨年度のカナダ文化振興会児童文学賞受賞)

●アンリエット・マジヨール「L'Evan-gile en papier Ⅱ 楽しい聖書」(Fides 発行、一九七七年)

新訳聖書から子供向けに書いた話を集めたもので、クロード・ラフオーチンによる三面体の切抜き絵をカラー

写真にしてイラストに用いている。(ラフオーチン氏は、この作品により、七七年度カナダ文化振興会児童文学賞のイラスト賞を受賞している)

●デニス・ウル「Lune de Neige Ⅱ 雪で作った月」(Guy Mabeux 発行、一九七七年)

四人の子供が犬、猫、猿とクリスマスに月へ行き、民話や物語に登場するいろいろな人物と会うという劇。(同児童文学賞受賞)

●モアカイ・リックラー「Jacob Two-Two Meets the Hooded Fang Ⅱ ヤコブちゃんちゃんのぼうけん」(McClelland and Stewart 発行、一九七五年)

ヤコブは五人兄弟の末っ子。何か言っても一回目は誰も聞いてくれないので、いつも同じことを二回繰り返して言う。彼の不満をなだめようと、初めてお使いに行くことを許される。ところが八百屋さんが威圧的だったので、公園に逃げてしまう。そこで大人に失礼なことをした罪で裁判にかけられ、電話もかけられない、道も横断できない、自転車も乗れない、もちろんお使いにも行けない子供の刑務所に、一年と二カ月と二時間入れられることになる。そこから兄と姉らしい二人の子供に助けられる。

●ミュキ・タノベ、モーリス・サビナック協力「Québec je t'aime I Love you Ⅱ 私が愛するケベック」(Tundra Books 発行、一九七六年)

ケベックの風物を温かく、また楽しい絵と文章で紹介した、ケベックへの「ラブ・レター」。

最近の文学作品

■フランス語関係

◇ロッシユ・キャリエ「Un pays sans grand-père (祖父のいない国はない) エディション・アンテルナショナル、一九七七年刊

主人公は、ヒュー・トーマス。自分を軽蔑し冷笑する家族たちの中にあつて、彼はよろよろと死を待ちながら、自分の一生を静かに振り返る。陽気で楽しかった青年時代、木こりの仕事、自分を取りまく世界の進展——戦争、身の不運や災難、遅々としたケベックの抗争など…。

長い内面の独白でつづつたこの物語は、作者ロッシユ・キャリエの六番目の小説であり、前の全作品と同じように、優しさとユーモアと力に満ち、輝くような作品となっている。全体にみなぎる深い人間愛、筋立ての単純さ、平易な用語など、ケベック文学の伝統はこれでまた一層豊かになったといえる作品である。

◇ナウム・カッツァン「La Traversée (十字路) エルチエビスHMH、一九七七年刊

作者ナウム・カッツァンはバグタッド生まれ。パリに学び、カナダにやってきたのは二〇年ほど前だが、骨の髄からのカナ

ダ人だ。ラベル大学で教鞭をとるかたわら、たくさんの本を書いた。現在はカナダ・カウンシル(カナダ文化振興会)の文学部門の長の地位にあり、小説、随筆、脚本、評論などに多彩な活動をくりひろげている。

短編小説集「Le Traversé」には、ナウム・カッツァンのカナダに対する深い理解が示されていて興味深い。舞台はさまざまな都会であり地方であるが、精密な背景設定をみると、作者が微妙な陰影まで十分に計算に入れているのがわかる。

標題になった短編「The Crossing (十字路)」では、この本全体のテーマ、つまり旅によって人々は別離と出合いを繰り返すのだ、ということが語られている。「Le Voyage (旅)」では、アフリカで出会い、結婚した若い二人が妻の故郷モントリオールに帰ってくる。フランス人の夫ビエールは、妻モニクが家族や住んでいる町や文化に押し潰され、アライバシーも侵害されている、と考える。やがてビエールが去っていくと、彼女は何かほっと救われたものを感じてしまう。

「Le Prochain Avion (次の便)」は、結末を暗示するように、トロントのCNタワーのエレベーターの中で出会う二人

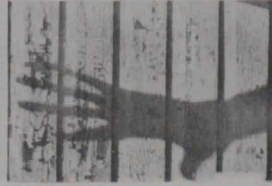
の話。女はニューヨークへ、男はやはりどこかの故郷の町へ帰る途中である。二人の間には恋が芽生えるが、セックスまでには至らない。彼女は何度か出発便を見送り、ついに空港で翌日までここに残りますと告白するのだが、すでにもう遅すぎるのだった。彼女はなぜ自分にも男にも自然の喜びを拒んだのか。自らを偽ったのだろうか：判断は読者にゆだねられている。

◇アンドレ・マジヨール「Les Rescapés (生き残った者達) エディション・カンズ、一九七六年刊

アンドレ・マジヨールの初期の作品(主に詩と論評)は有力な急進的雑誌「パルティ・プリ」に発表されている。「パルティ・プリ」というのは雑誌の名前であると同時に、一九六〇年代にケベック州の世俗化と社会主義化と独立を唱えたグループの名前で、マジヨールはやがてこのグループから離れ、作家活動(主に小説)に専念するようになった。「Les Rescapés」は「Histoires de désemparés (逃亡者の歴史)」という副題をもつ三部作の最後の作品で、昨年の春マジヨールはこれでカナダ総督賞をもらった。この三部作は全体として読んで初めて疑問が明らかになり、謎が解かれ、ギャップが埋められるという性格の作品である。

「逃亡者」

マジヨールの「Les Rescapés」



はときに都会人であり、あるいは田舎者である。平凡な者はいるが

ステレオタイプな者は一人もいない。農村と都市の分裂という問題も浮き彫りにされる。三部作の中心人物はモモ。モントリオールの都会っ子は、モモのことを「田舎っぺ」と呼ぶ。この大都会はモモの恋人ジジ(コールガールになって後に殺されてしまう)に対しても、セント・エマニュエルのホテル経営者の妻(夫婦仲はとつづく昔に冷えきっている)とその妹にも、そしてまたモモに対しても、ほんの一時の救いしか与えてやれない。三部作のうち最初の「L'Épouvantail (案山子)」は、「The Scarecrows of Saint-Émmanuel (セント・エマニュエルの案山子)」という題ですでに英訳されており、あとの作品もいずれ英訳されるだろう。

■英語関係(フランス語からの英訳も含む)

◇ヒュー・アトキン「A New Atten (新しいアテネ) オベロン社、一九七七年刊

この小説は、一九五〇年代のストーバービル(オンタリオ州)およびその周辺に住む人々の物語である。一人称形式で物語はすすめられる。語り手の主人公はマット・ゴードリッチという名前の悪意のない人物で、若干ラジカリストの国会議員を父にもつ。彼はストーバービルに住む裕福な娘たちの大半と淡い恋におちるが、やがてその中の一人、中規模金物店を営む実力者の娘エディ・コッドリントンと深い仲になる。

「A New Atten」は、E.M.フォスターの「Howards End」と同じような意味で実に素晴らしい作品だ。巧みで真実味のある筆致、時と場所と社会階級を写実絵

のように写し出し、技巧を全く感じさせない。フッドが描き出したものは、人々であり、家々、芝生、川、そよ風であるが、それだけでなく圧力と欲望と幻影と信仰——つまりひとつのカナダ社会がそこに描き出されている。マットが恋人のことを語る部分を見よう。

「(そうしたことの)全てが僕の頭の中にある彼女のイメージを高めた——王女のような、気高く、女神にも似た、まるで妖精のような姿だった。僕にとつてはとても魅惑的で、しかも何艘ものボートとボートハウスをもった女の子だった。ボートにボートハウス——数年前までは僕もどんなに欲しいと思ったことか。つまり、僕が彼女に初めて会った時、僕はひどい俗物だったのだ。そうだその通りだ。僕が彼女にひかれたのは、彼女の容貌や振舞いのためでもあったし、彼女のボートハウスのせいでもあったのだ……」

「A New Athens」は、十二冊からなるシリーズ作品の二冊目で、第一作は、「The Swing in the Garden」。後の十冊も大いに期待されるところである。

◇チャールズ・テンブルトン「Act of God (神の行為)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七七年刊

この作品で著名なテンブルトン氏は、スキャンダラスなプロットを採用した。氏自身はカナダ人だが、小説の舞台はローマ、ロンドン、そしてニューヨーク大司教管区と世界各地にとび、ドラマの大半は枢機卿の家で展開される。(これはいわゆるモデル小説ではない。主人公の枢機卿が故フランス・カーディナル・

スベルマンでも今のテレンス・カーディナル・クックでもないことは明らかだ。)中世イタリアの枢機卿でなく、現代のアメリカ系アメリカ人枢機卿なのだが、どうやらこの主人公は殺人犯らしい。しかし彼は高名な長老派の説教者の家に生まれ、長ずるに及んでローマカトリックへ改宗しており、殺人者らしくないし、殺人者であったとしても、世界教会的な殺人者ではなさそうである。

彼がもし殺人者だとしたら、一体どんな動機が考えられるのか。

答えはすばらしく簡単——イエス・キリストの骨がその答えだ。

もしここに一人の考古学者がいて、イスラエルのとある丘の中腹の洞窟でイエスのものだと証明できる骨を実際に見つけたとしたら、あるいは見つけたと主張したとしたら、イエスは死から甦ったというキリスト教の根本教義は、一体どうなるだろうか。だがもしも、そのような発見や主張を知っているのはただ二人だけ——秘密主義の考古学者と彼のプリンストン大学時代の学友である当の枢機卿——だとしたら、枢機卿はどうするだろうか。

テンブルトン氏は巧みなストーリーテラーである。物語の二重の謎をとくのは、ここに登場する温厚な探偵たちの一人。まだ若さを残した中年の独身男で、地区検事の椅子にも興味があるが、枢機卿の美しい姪にも気のあるという人物である。

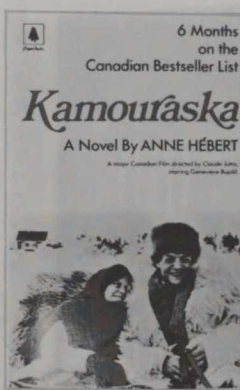
◇アン・エベール「Children of the Black Sabbath (ブラック・サバトの子供たち)」(キャロル・ダンロップ・エベール訳)

マツソン・ブック社、一九七七年刊

アン・エベール作「Kamouraska」は、素晴らしい映画にもなった秀作だが、今度はその英語版が「Children of the Black Sabbath」として出版された。

この小説は、短いが力強い作品で、前述の「Act of God」と同じようにある種の不敬虔な匂いを持っている。主人公は三位一体派の尼僧ジュリー。「高貴なる血」派に属する彼女は、簡単に言えば、悪魔にとりつかれた尼僧である。

これは孤独で、狭い世界の、しかも強烈かつスリリングな物語である。狭さというところが唯一の欠点といえはいいえかもしれない。修道院の個室の殻にとじこもった悪魔つきの尼僧の話が、より広いケベックの話とうまくつながればいいと思う読者がいるかもしれない。尼僧ジュリーの心の中に跳梁する人々のほかにも、全く違った行為の世界に住む独立した人も登場させればいいのに、と思う人もいであろう。



◇ポーリン・ケッジ「Child of the Morning (朝の子ども)」マクミラン、一九七七年刊

「Child of the Morning」は、日頃台所や速記者の溜り場に閉じこめられている人にとっては楽しい休息をもたらす、そんな作品である。これもテンブルトンの「Act of God」と同様、ベストセラーの

条件満々だ。アルバート州ハンナ出身のポーリン・ケッジはこの作品で原稿にして四〇三枚を書き上げた。これは古代エジプトの唯一の女性統治者ファラオ・ハットシェプスートの物語である。ハットシェプスートは二十年にわたり見事な統治を行なったが、彼女の後継者であり異母兄弟であり夫であり欲求不満の求愛者でもあるトトメスにより記念碑からその名を削りとられ、その平和な時代の記録を焼かれてしまった。

「Child of the Morning」は、かつて(果敢な)女の小説」とされたものの範疇に入るかもしれない。確かにハットシェプスートは史上最初の婦人参政権論者だったが、同時に歴史物語の古典的なヒロインでもある。文章は濃厚で香り高く、まるでナイルの川のように、時にその堤からあふれ出し、読者をして快い興奮の渦の中にひたらせてくれる。

「彼はさつと立ち上った。グラスが手から落ち、赤いワインが床に飛び散った。たつたの二歩で彼女の傍までくると、歯をむき出し、うなるように言った。「王位など関係ない。王位がほしけりや、明日にでも手に入る。」

「それは嘘よ。彼女は落ち着き払っていった。「あなたにはまだそんなことはできっこないわ。自分でもそれはご承知のはずよ。なぜここにいるの、トトメス。何が欲しいんです。」

彼は空のグラスを彼女の手からひたくと、部屋の隅めがけて投げつけた。彼女の腕をぐいと掴んで背中しまわし、彼女のからだを自分の方に引き寄せて、荒荒しく言った。「お前だ。わしが欲しいの

はお前なのさ、誇り高きフアラオよ。…」
「Child of the Morning」がアルバート小説賞を得たのは、当然のことであろう。とにかく、長い平原の冬を、ベッドの中で毛布にくるまりながら愛読するには、ぴったりの本である。

◇モテカイ・リックラー「The Apprenticeship of Duddy Kravitz (ダディ・クラビッツの徒弟時代)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七四年刊。

「Son of a Smaller Hero (小英雄の息子)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九五五年刊。

「St. Urbain's Horseman (セント・アーベインの乗馬者)」バンタム、一九七二年刊。——モントリオールの古いユダヤ人地区の生活と外部の広い世界の生活を描いたもの。作者のリックラーは、おかしみと、ピリツとしたところのあるモラリストで、(他人の意見や考え方を)受け入れはするが承認はしないという面白い作家である。

◇ガブリエル・ロウ「Bonheur d'occasion (その場限りの幸せ)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九五九年刊。

「The Tin Flute (アリの笛)」(ハインナ・ジョセフソン英訳) マクレランド・アンド・スチュワート、一九六九年刊。——ケベックを覆っている緊張状態を概略理解するのにすぐれた小説。

◇ロジエ・ルマン「Au pied de la pente douce (なだらかな山の麓で)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九六

八年刊。「The Town Below (町の人たち)」(サミュエル・パトナム英訳) マクレランド・アンド・スチュワート、一九六一年刊。——ケベック市の労働者階級をいきいきと描き出した作品。

◇マーガレット・ローレンス「A Test of God (神の戯れ)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七四年刊。(一九六六年刊の「Rachel, Rachel」と同じもの) ——中西部カナダの農村生活に充足を求める教師の話。映画にもなったが、小説の方がすぐれている。

◇ロッシユ・カリエ「La Guerre, yes sir, Éditions・デュ・ジュール、一九六八年刊。(シエイラ・フィッシュマンによる英訳本は一九七〇年にアナンシ社から) ——下層兵士のみだらな軍隊生活を描いたもの。

◇アライアン・ムア「Le Marquis D'enne」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七六年刊。——オンタリオ州の小さな町からトロント、モントリオール、ニューヨークへと渡り歩き、夫を何度も変え、現実から新たな現実を求めるうちに自己を見失い、最後に混乱に至る三十三歳の女の絶望の一日を描く。

◇ロバートソン・デービス「The Business (五番目の職業)」、「The Manticore」、「World of Wonders (不思議の世界)」マクミラン、一九七〇—一九七五年刊。——現代の最も偉大な三部作である。二〇世紀の英語系カナダについて知る必要

のある全てが描かれている。どこをとってみても、おそらく読者が知らねばならないことばかりだといえよう。作者のデービス氏はカナダのデイケンズともいえる作家で、あたかも父なる神がその世界では根本的なものでありながら目には見えないのと同じように、デービスも彼の創造した世界の中では普遍的かつ目に見えない存在となっている。



◇ヒュー・マクレナン「二つの孤独」マクミラン、一九六八年刊(初版は一九四五年)。——一九一四年から一九三九年のフランス語系カナダと英語系カナダの関係を描いた作品で、この問題を扱った古典的小説。

◇マーガレット・アトウッド「Surfacing (浮上)」ペーパージャック、一九七三年刊。——ケベック州北部の遠い湖の傍に住む、現状に不満な若いカナダ人の物語。最後にヒロインは、これ以上犠牲者であるのをやめようと決心し、「浮上」する。

◇シンクレア・ロス「As For Me and My House (私と私の家)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九七〇年刊(初版は一九四一年)。——自称芸術家の牧師とその妻が、平原と風と土埃と孤絶と牧

師の仕事と、町とそして自分自身にとらわれて日々を生きるという話。

◇ステファン・リーコック「Sunshine Sketches of a Little Town (小さな町の日向風景)」マクレランド・アンド・スチュワート、一九四八年刊(初版は一九一二年)。——著者は米大陸が生んだ最も愉快な二人の思想家の一人。

■エスキモ文学

◇ジェームス・ヒューストン「The White Days (白い夜明け)」ハーコート・ブリース・ジョバンピッチ社、一九七二年刊。——エスキモが初めて白人と接した頃の話にもとづいた小説。ヒューストン氏は、バフィン島で十二年間暮らし、原住民芸術家に版画作りを教えていた。

◇「We Don't Live in Snow Houses Now: Reflection of Arctic Bay (俺たちの家は雪の家じゃなくなった——北極湾の回想)」(ローグ・インヌクスクとスターザン・コーワンによるインタビュー) カナディアン・アークティック・プロデュース社(ハーティック)、一九七六年刊。——「昔は俺達は何時間も外で遊んだものだ。それでもちつともここえるなんてことはなかった。ところが今じゃあ暖かい家に住んで、寒さに弱くなっちゃった。子どもらはもう外では遊ぶことができない。寒すぎて我慢できないんだ。俺達が若い頃は、肉だけを食って生きてきたものよ。あんた達も肉を食うと、体が丈夫になり、血もふえて暖かくなるだろう。」



カナダの主要な雑誌と新聞

カナダで発行されている新聞や雑誌は無数に近い。全国だけでなく海外でも購読されているのもあれば、三〇〇部とか五〇〇部といった、小さな町の小さな週刊誌まで、その種類も豊富だ。またモザイクといわれるカナダ社会の多様性を反映して、日本語を含め、何十もの言語で発行されている、という具合である。こ

れらの雑誌や新聞については、Canadian Almanac & Directory (Copp Clark Publishing, Toronto) にリストアップされているので、それを見ていただくこととして、ここでは当大使館にある定期刊行物の中から、主要なものをご紹介します。

●雑誌

Maclean's カナダ全国で読まれている隔週発行のニュース誌で、国内の政治、経済、社会、文化などの動向を報道・解説し、また国際的なできごとを扱う。創刊は一九〇五年。今夏から週刊に移行する予定。

Saturday Night 年十回発行の一般向け総合雑誌。カナダ国内のいろいろな問題を署名入りの記事で解説する。旅行記や演劇、テレビ、映画、出版物などに関する批評も。

Chatelaine 英仏両語で出版されている女性向けの月刊総合誌。女性開放（あるいは女権拡張）、料理、ファッション、家庭など、女性に興味あるトピックスを掲載している。

The Canadian Forum 月刊の総合評論誌。書評など文芸批評にも力を入れている。

International Perspectives カナダ外務省発行の隔月誌。世界におけるカナダの役割やカナダ国民に関心のある国際的時事問題に関する署名入りの解説や意見を掲載。

ほかに、評論誌として Opinion や Dimension、文芸専門誌として Performing Arts in Canada, Art Magazine, The

Music Scene, Motion, The Canadian Composer (Le Compositeur Canadien), Take One, Nouveau Cinema Canadien, Vie des Artsなどがあげられる。インディアンやエスキモーに関する The Native Perspective、カナダの自然に焦点を当てた Nature Canada、フロンティア時代のカナダを扱う The Beaver、ケベックの政治、経済、社会情勢を伝える季刊の Perspectives、カナダの歴史と伝統を専門とする Heritage Canada という雑誌もある。

またカナダの経済誌としては、The Financial Post, Canadian Business, Canada Commerce (通商産業省発行)、Trade and Commerce (西部カナダの通商産業)、Business Life (西部経済・産業界の動向) などのほか、Drug Merchandising, Canadian Woods Products, Canadian Pulp and Paper Industry, Canadian Automotive Trade, Men's Wear といった雑誌も発行されている。

新刊案内

ジョージ・ラドワンスキー著「トルドー」(Trudeau)。Macmillan of Canada, Toronto 発行。一九七八年。

自由主義諸国の政治的指導者が、次々と舞台から消えていく中で、カナダのトルドー首相は、一九六八年四月以来、十年も政権の座に就いている。かつてのデイリーフエンベーカー首相やピアソン首相の、およそ二倍という長さである。

そして、今日の指導者の中で、トルドーほどカリスマをもち、話題を提供

し、愛され、あるいは憎まれた人物も少ない。

一九四七年生まれの、気鋭のジャーナリスト（わずか二十五才でモントリオール・ガゼット紙の副編集長になり、現在はファイナンス・タイムズのオタワ総局長兼国内政治コラムニスト）によるこの本は、トルドー首相との八時間にわたる会見のほか、彼の周辺の人たちや彼に批判的な政治家などとの会見、およびトルドー首相の著作や発言をもとに、この十五代目のカナダ首相の人物や政治理論、実際の行政過程などをきわめて描写的にまとめている。

アレックス・イングレス著「北の放浪者」(Northern Vagabond)。McClelland and Stewart 社発行。一九七八年。

一八九三年、J・B・テイレルという男が、ハドソン湾の西に広がる荒涼たる大ツンドラ地帯（バレンランド）を横断した。その時まで、地図の上では全くの空白に過ぎなかったこのツンドラ地帯で、テイレルは恐竜の化石や石炭の大鉱脈を発見する。その後、彼は長い探検生活を離れ、クロンダイク・ゴールド・ラッシュに加わって金鉱探しに熱を上げる。そしてオンタリオ北部で鉱山コンサルタントとして活躍するかたわら、探検家デイビッド・トンブソンについて書く――。

「International Perspectives (カナダ外務省発行の外交問題評論誌)」の編集長でピアソン首相の伝記の編集者でもあった著者により、忘れられた一人の探検家が過去から呼び戻された。

カナダの女流作家

近作に見る男女の関係

カナダの解放された女流作家達（それが正しい呼び方かどうかは別として）は、最近、男女両性の状態について特筆すべき結論を出し、世に問うている。

例えばマーガレット・アトウッドの「

レディ・オラクル（『女子言者』の意味）」

（一九七六年）。主人公はジョーンとい

う名のでっぶり太った娘。母親はほっそ

りとスマートで、階層的な上昇志向性が

強く、いつも欲求不満におちいつており、

白い長手袋をはめ、ときには深酒で酔っ払

う、そんな女である。ジョーンは、やが

て体重を半分ほどに減量することに成功

し、二重生活を送りはじめる。裏では、

金持で力強くしかも薄情な男達と、貧し

くほっそりと愛らしく、男に頼って生き

る女たちの、悪趣味な大衆恋愛小説を（

こっそりと偽名を使って）書く。そして

実生活では（これを生活と呼べるとして

の話だが）、一連の無気力な男たちと生

活する。第一の、少々滑稽に描かれた男

は、彼女の夫で、どことなく学者肌の、

たえず成功の望みのない理想（それ自体

望みがないわけではないのだが、アーサ

ーがかかわるとそうなってしまうのであ

る）を追い求めている人物。第二の男は

年上の亡命者で、ポーランドの弱小貴族

である。三番目は気違い、というか気違

いじみた芸術家気どりの男で、車にひか

れた都会の動物の死体を凍らせては、展覧会の陳列品を作っている人物である。

ジョーンの相手の男達は、ジョーンに

とっても読者にとっても、どうしようも

なく子供っぽく、わずらわしい。何とも場

ちがいないのである。一方、ジョーンの方

は成熟しきった人物として描かれ、彼女の

叔母も大した人物ではないが、健全で

ヒューマンである。母親はほんの骨格し

か描かれていないが、それでもどこか興

行きがある。それに対し、男の描かれ方

は平面的ですらなく、棒線画みたいだ。

もちろん、子供っぽい女と同じように子

供っぽい男も現実にはいる。自分の男ら

しさに自信満々の、大変滑稽感のある男

もいるが——デイケンズの作品にはわん

さと出てくる——しかしこれが興味をひ

くためには、何よりもこうした人物が人

間的でなければならぬ。

ジョーンは、自分が死んだと見せかけ

て、結局は男たちをふり捨て、イタリア

に行く。小説の終りの方で、彼女は名前

も顔もわからぬある若い報道記者と親し

くなるのだが、この男はもはや一次元的

ですらない、つまり（読者には）見えな

い。解放された人間の結末は孤独である

——この小説はこう語っているようだ。

マーガレット・ギブスン・ギルボード

の「バタフライ・ウォード（蝶の病棟の

意味）」（一九七六年）は、この才能あ

る作家の処女作である。ギルボードは、

周囲から絶対的に隔離された女達、とく

に精神病院の婦人病棟に収容されている

女達を書く作家だが、並みはずれた洞察

眼と共感を持ち、精密にこれを描き出し

ている。だが男の方は、不幸にして断片

的だ。ギルボードの小説の中で最もすぐ

れているのは、男が全然出てこない作品

である。たとえば「彼女の状態にしては

（Considering Her Condition）」などの作

品における男は、たしかにあざやかな描

出ではあるが、傍観者としての存在でし

かない。彼女の書いたものの中で最も迫

力のない話の中では、主人公が父親とか

おどおどした夫とか、とにかく男なのだ

が、これらの男は物の見方、反応の仕方

が、精神病棟にいる女の条件反射そのま

まなのである。とにかく、ギルボードの

書く小説は迫力があり、読む者を不安に

落として入れる力を十分もっている。そこ

においては、両性間の溝というよりは、

感じやすい者（精神病者）と感じにくい

者（正常人）との間の溝が問題となってい

る。その溝は、蝶とこうもりとの間に

ある隔りと同じように、厳然として越え

ることのできない深淵である。

ミルナ・コスタシユ、メリンダ・マクラ

ッケンらの共著「独立した女たち（Her

Own Woman）」（一九七五年）は、一

連の女性とのインタビューをまとめたも

のである。インタビューの対象は、個人

としての業績を確立した女性たちで、書

き手は才能ある若い女性たちである。内

容は、面白いほど変化に富み、登場する

女性はいんな解放された人々であるが、

かといって軍隊式に単色ではない。多く

は、特定の男性と満足できる互いに尊敬

しあう関係を持っている。多少なりとも

名の通った人達——前関係のジュディ・

ラマーシユ、陸上競技のスター、アビー

・ホフマン、労働運動のリーダー、マド

レーヌ・パレン、画家エスター・ワルコ

フ、小説家兼詩人兼批評家のマーガレッ

ト・アトウッド、カナダ・ラジオ界のト

ップーパーソナリティ、バーバラ・フラム

——と、無名の女性たち——インタビュ

ーアリーの母親イーディス・マクラッケン、

見事なまでに確信に満ちた若い女性キャ

スリーン（姓は明らかにされていない）、

歌手兼作曲家のリタ・マクニール、ラジ

オ局のドキュメント制作者バーバラ・グ

リーン——が登場している。

この本は各部分よりも、全体から浮か

び上ってくる性格が興味深い。登場する

女性の誰一人として、いわゆる犠牲者は

いない。ステレオタイプ化された男女の

あり方は実生活の中ではなく、悪しき芸

術の中の存在であるという、希望に満ち

た真実が、彼女たちのバイタリティと個

としての人格を通じて、読む者の胸に伝

わってくるのである。

どのインタビューもみなすぐれた内容

だが、とくにミルナ・コスタシユが相手

をしたキャスリーン、メリンダ・マクラ

ッケンが相手をしたエスター・ワルコフ、

エルナ・パリスが担当したバーバラ・グ

リーンのものが光っている。

以上見てきた作品は、カナダの最もす

ぐれた作家のかなりの部分が、真に独立

した女性であることを示しているといえ

よう。

「カナダの社会はモザイクだ」とよく言われる。たしかにカナダの生活を始めた時、その人種と文化の多様であることが、日本で育った人間には大きな驚きであった。向こう三軒両隣り日本人ばかりで、社会とはこういうものだと思ひこんでいた私は、オンタリオ州キングストンのアパートの住人となった時、カナダ人とは何人なのかと不思議に感じたものだ。

アパートに引越した日に、夫と私は近所の方々にごあいさつに行ったのであるが、そのときの出会いがまだ強く印象に残っている。まず、わが家の右隣りの上品な老夫人は、ひとり住まいで、イギリスから来たばかり。左どりの家族は、若い二人で、昼間はいつも留守だという。廊下をはさんで前のお宅は、「アイルランドから来た一家です。ようこそカナダへ!」。そのお隣りは、にこにこした生れながらのカナダ人の中年の御夫妻——という具合で、私たちの近所付き合いが始まった。

アパートに住んで間もなく、よく顔を合わせる同じ階の人々の中に、まだまだいろいろな国々から来た人々がいることがわかった。二人の子供のいるパキスタン人の家族、それからポルトガルから来た若い二人。異なった人種、文化の背景をもった人々が、ごく当たり前のようにならばかりの生活がしみついた私には、とても不思議な気がした。そういえば、東洋人の姿をした私が、どこへ行っても何の異和感もなく自然に応対されるのが、カナダ社会の特色ではないかとさえ思ひ始めた。

そんなある日、我々は、隣人の若い二人——彼女マリーはこの町の法律事務所の法律秘書、彼シースはちょっと天才肌の軍楽隊の音楽家——を、夕食後のひととき、日本のウイスキーやおつまみを用意して招いた。「カナダはどう?」という話から始まって、夜遅くまで楽しく飲んでしゃべったその夜の話の中で交わされたシースの次の言葉は、私の心にカナダ

カナダの生活の中から

川村 総子



の生活の最後まで消えることがなかった——「カナダに住んでいけば、みんなカナダ人だと僕たちは思っている。今、君たちはすぐに日本人というけれど、カナダに住んで英語を話している君達を、僕はカナダ人だと思う。」日本に住む外国人に、こんなことを言う日本人がいるだろうか。異邦人ということばを頭の中にちらちらさせながら暮らしていた私たちに

は、何というあたたかな言葉だったろう。夫の勤務する研究所で翻訳を専門にする女性は、私達がこの町に着いた日に紹介された時、ポーランドから来ましたと言っていた。そのアイリーンと御主人のエドが、わが家の夕食に加わった夜、私はまた面白いことを聞いた。彼らは、十年前カナダに来るまで、九年間イギリスに住んでいたという。そして、エドのいうことに、「イギリスで苦勞して大学を出たけれど、ポーランド人の下で働くイギリス人なんていやしない。一生イギリスにいたって、ポーランド人はポーランド人と言われる。それに比べ、カナダでは、昨日カナダに来た人だって、ニュー・カナディアンと呼んでくれる。そして、実

力さえあれば、何国人なんていうことをいう人間なんていない!君たちもずっとカナダに住んだら?」彼の言葉の中には、移民として苦勞し、今、新しい地で根を張り、立派な研究者として生活を営む人の自信と、カナダに対する誇りと愛情が感じられた。

私は、この二人の言葉の中に、ぴったりに一致するものを見出したことが面白かった。又日本人であることを毎日心の中心でくり返し、言葉が不十分であることからくる疎外感と、自分の育ってきた文化の根を見出せない社会に生活している不安をもって暮らしていた私には、開放感を与え、カナダ社会の良さをしっかりと感じさせてくれる言葉だった。少くとも、社会のお客様ではなく、市民として、この土地に愛情を感じ、地に足のついた生活を心がけようと思ったのだった。

編集後記

○今号はカナダ文学に焦点を当ててみました。カナダの文学作品や文学史を通じて、その国民性や社会に対する理解を深めていただきたいと思ひます。

○できるだけカナダ文学の全体像をお伝えしたかったのですが、編集者自身にもいくつかの不満が残りました。インディアンやエスキモの作品をはじめ、カナダを構成するいろいろな民族の文学をご紹介する事ができませんでした。カナダにおける文芸評論の第一人者ノースロップ・フライについても、ごく簡単にふれただけです。両方とも、別の機会に取上げるつもりです。

○当然紹介すべき作家でありながら、もれてしまった人もあるかもしれません。「空港」などで有名なカナダ出身のアーサー・ヘイリーや、最近日本でも話題になった「最後通牒」や「英国脱出」の著者リチャード・ローマーなどについても割愛せざるを得ませんでした。

○カナダ文学は、一部を除いて、日本ではこれまであまり知られていませんでした。この特集号により、いくらかでも関心を高めていただければ幸いです。ご意見やご感想をお寄せ下さい。

編集者 吉田健正

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100東京都港区赤坂七丁目三十三八

カナダ大使館広報部